特259
307

賀茂
俊寛
松風
西行
櫻
浮舟

内十

始

特 259
307

342-622.

賀茂

觀竹氏信作

曲柄　初能　一番目　神祇物
季節　六月
稽古順　四級
所　山城國京都市賀茂神社

梗概

播州室の明神の神職(ワキ)、明神と御一體なる京都賀茂の社に參詣せしに、時しも秋近き六月、川風涼しき御祓川に水汲む二人の女性(前シテ、前ツレ)あり。見れば、新しき壇を築き白木綿に白羽の矢を立てて禮拜せるにぞ、怪しみてその謂れを尋ぬれば、昔この里に秦の氏女といひし人あり、朝夕この川邊に出でて水を汲みしに、或時川上より白羽の矢一つ流れ來りて水桶に留まれるを、取りて歸り庵の軒にさし置けば、女思はず懐胎して男子を生めり。別雷の神は卽ちこの神にして、母も亦神となりて、賀茂三所と齋ひ祀るなりと語りて、また水を汲みけるが、やがて眞はわれこそやごとなき神なれといひて、神隱れになりぬ。(中入)

やゝありて、女體の御祖の神(後ツレ)現れて舞を奏し給へば、別雷の神(後シテ)また出現して、雷の音とどろとどろと踏み轟かして、五穀成就國土守護の誓ひを示し給ふ。

謠ひ方

神祇物の中にも前は女なり、神々しき中にも優にやさしく、餘り位を取らず、後半は清爽に猛々しく雄壯活潑に謠ふ。

△**シテ**　眞の一聲の出は、落着あり少しく抑へて神々しく謠ひ出す、女なれども强吟なれば、和らかく謠はず、上歌には「時鳥」より弱吟となれば態とならぬ樣に、ワキとの掛合は閑かの內に運びを付け、語は閑かに、「同じ流れの」より段々と詰め、ロンギは朗かに清く、「誰とは今は」と神々しく莊嚴に閑めて謠ふ。

△**後シテ**　出は堂々と威を籠めて、以下地との掛合は走らぬ樣に强く確かりと謠ふ。

△**ツレ**　シテとの連吟はシテの調子に從ひ、一人の時はシテより調子高くさらりと謠ふ。

△**後ツレ天女**　素謠の時は前ツレと同人が謠ひても宜し、さらりと勢ひを付けて謠ふ。

△**ワキ**　さらりと勢ひよく謠ひ出し、道行も滯らぬ樣に、シ

テとの掛合は位を持ちてさらりと謠ふ、素謠の時はワキツレを略して一人にて謠ふ。

△**地**　勢ひよく受けてさらりと朗かに出で、以下運びを付けて、ロンギは麗はしく清く、「恥かしや我姿」と氣を替へ閑かにたつぷりと、中入後「守るべし」とさらりと淀みなく、次より乘りよくさらりと、「山河草木」と乘らずに手強く、段々進んで、「或は諸天善神と」より乘りて勢ひよく走らぬ樣に、シテよりはさらりと謠ふべし。

能の異式（小書）

素働（しらはたらき）　―　前のロンギをツレに謠はせ、中入前、又後も位が重くなり、後シテの頭に金の光を附け、働も變る。

語　釋

清き水上尋ね來て　―　室の明神の本社なる意を、賀茂川の水上にかけて云ふ。

賀茂の宮居　―　京都府京都市にあり。上賀茂、下賀茂の二社に分る、上の社には別雷神を祭祀し、下の社には別雷神の御母玉依姫と賀茂建角身命とを祭祀す。

室の明神　―　播磨國揖保郡海邊にあり。

室の扉の曙に（とばそ）　―「室の門」と「扉を明くる」とをかけていふ。門は海門の意で、瀬戸などゝいふに同じ意。

飾磨の徒路　―　播磨國飾磨郡を過ぐることを產物にかけていふ。昔この處より「かちん染」とて、濃き紺色の染物を出したるを、それにて旅衣を染むるやうに云ひなせるなり。

山陰の　―　社地の東の山をば神山とも、日蔭山とも、二葉山ともいふ。

御手洗　―　神社の前を流るゝ川をいふ。

紀　―　下賀茂の地域の森をいふ。

なかば行く　―　六月の半ば過ぎたるをさす。

影更けて　―　月影の更けたる意にかけて、夏の殘り少なくなりたるをいふ。

やたけの人　―　いよ〳〵猛き人の意。

弓筆に殘す　―　文武の道に神威を傳へ殘すの意。

上る代　―　上古の意を、天に上りたることにかけて云ふ。

下は白川　―　京都市北白河の奥より出でゝ、三條と四條との間にて賀茂川に合流する川の名。

石川や瀨見の小川の云々　―　新古今集、鴨長明の歌なり。石川、瀨見の小川は賀茂川の一名なり。

歸らぬはもとの水　―　一度流れ去りたる水のもとにもどらぬを云ふ。鴨長明の無名抄に、「行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず」とあり。

いづくとか　―　いづくとか答へ言はんと云ひかけたり。

白玉の音ある水や貴船川云々　―　白玉は瀧の形容詞、續千載集に、「貴船川うき年波のかゝれとは祈らぬものを袖の白玉」などゝありて、緣ある詞となれり。貴船川は、鞍馬の西を流れて鞍馬川に入り、末は賀茂川となる。

水もなく見えし云々　―　後拾遺集に載す、藤原定頼の歌、「水もなく見えこそわたれ大堰川峰の紅葉は雨とふれども」とあるを引用す。雨降れば水まさるが常なれど、是は紅葉の雨ゆゑ、其散り浮くために水の隱されたるを詠めり。是よりは賀茂川の水上を尋ぬるついでに、大堰川の方を取り交へて趣きを添ふ。大堰川は丹波國桑田郡より出でて、嵐山の麓を流るる川。雨と降るの詞は、嵐の文字につゞけて、紅葉吹き散らす由に云へるなり。

嵐の底　―　嵐山の名を含めて云ふ。

戸無瀨　―　大堰川の上に急流二所あり。龜山につゞきたる方を龜尾の瀧といひ、嵐山につゞきたる方を戸無瀨の瀧といふ。

名にや流るらん　―　名にたちて聞ゆるの意。

清瀧川の水汲まば云々　―　新古今集第一卷、春歌上に載す、西行法師の歌、「降りつみし高嶺のみゆきとけにけり清瀧川の水のしらなみ」とあるを引用す。歌意は、高嶺に降りつもりたる雪も解け、清瀧川の水かさまさりて高く浪立つよといへる意なり。清瀧川は、大堰川の上流なり。

汲まぬ音羽の云々　―　古今集第十七卷、雜歌上に載す、壬生忠岑の歌、「ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる」と詞書して、「おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黑き筋なし」とあり。これを引用す。歌意は、たぎつて落つるこの瀧の水上が久しくなつて、年寄つて見る所白髮ばかりで、黑い筋は一本もないとの意。

戴く桶　―　白髮をいたゞくと、水桶をいたゞくとの意を兼ねて云ふ。

身の上と云々　―　忽ちに老となるも他所事ならず。今に自らの身の上ぞといふ意。

うつろふ影　―　日影の西に移ること。

水むすぶの神　―　水を掬ぶと云ひかく。掬ぶは汲むことをいふ。むすぶの神とは、高皇產靈神、神皇產靈神とて、萬物造化を主宰する神をいふ。後には單に夫婦の緣を結びつくる神と心得る樣になりたれば、こゝは其意を以て云ひしなるべし。

あさまにや　―　あさましやより重ねて云ふ。神姿を見せ給ふには夜の明くるを忌むなり。

木綿四手　―　御幣のこと。

法界無緣　―　佛法世界に緣故なき不信者をさす。卽ち救度すべき緣故のなき衆生を云ふ。

感應　―　人間感じて神の之に應じ給ふこと。

影向　―　神の姿を顯現し給ふこと。

相好莊嚴 ― 身體の形貌相狀の普通に超異せる特點を數へて相好といふ。但し相は、身體の著明なる部分につき、好はその相中の細相につきていへるなり。佛身に三十二相、八十隨形好ありといへるものこれなり。該る相好の完備して、威嚴の尊貴微妙なるを相好莊嚴といふ。即ち御姿の威嚴あること。

綠の袖 ― 山水の綠を神女の袖にかけて云ふ。

涼みとる ― 涼しきをとるの意。すゞむと同意味。

垂跡 ― 佛の手段方便にて、假に神と出現すること。

和光同塵結緣云々 ― 超世的德光を和げて世俗の塵埃に同ずの謂なり。老子經に、「和二其光一同二其塵一」といひ、摩訶止觀に、「和光同塵結緣之初、八相成道以論二其終一亦名爲レ化亦名爲レ應」といへり。又玉葉集に載す、皇太后宮太夫藤原俊成の歌、「山櫻ちりにひかりをやはらげてこの世に咲ける花にやありけむ」とよめるも、この和光同塵の意なり。即ち佛菩薩がその本地に於ける無漏智の光を隱藏して、人天欲界の塵事に同じて神と出現し給ひ、緣を人間に結びて普く濟度し給ふことなり。

風雨隨時 ― 風雨ほどよく時節に順生することをいふ。

足音 ― 雨の足音なり。地に當るをさす。

鳴神の鼓 ― 雷の音を鼓に聞きなして云ふ。鼓の時もとつゞけたるは、昔鼓を打ちて時刻を報じたるがゆゑなり。

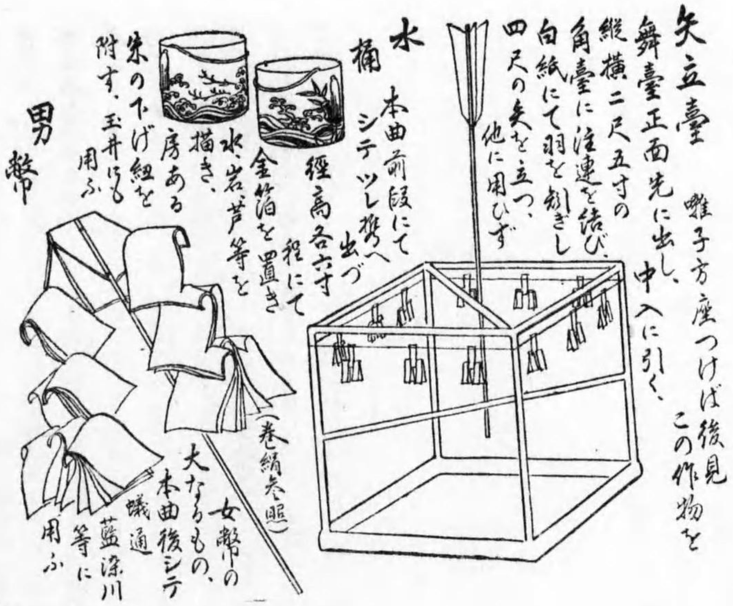
狂言

間

末社間、(別間は御田、神主が早少女を多人數引きつれて出で稻を植ゑるさまをする)。

斯樣に罷り出でたる者は。賀茂の明神に仕へ申す末社の神にて候。我等の是へ出でたる事餘の儀に非ず。昔此所に秦の氏女の在すが。正直を第一にして親に孝あり。殊に慈悲心深く神を敬ひ。何時も此河邊に立ち出で。流れを汲みて神に手向けられし故やらん。或時川上より白羽の矢一つ流れ來て。今の女人の水桶に留まるを。何心なく其の矢を取りて歸り。我家の軒に挿し置き給へば。彼の秦氏の主程(あるじ)なく懷胎し。玉を延べた如くなる男子を產(よろこ)び。我ながら不審に思はれけれど。斜ならず育てし處に。其子三歲ばかりになりし頃。御身の父は如何なる人ぞと尋ねければ。軒に挿し置きたる矢に指をさす。その時白羽の矢は鳴る雷と現じて天に昇り別雷(わけいかづち)の神となり給ふ。故に其の御母も神齋ひ。上賀茂下賀茂中賀茂とて。賀茂三所の御神是なり。去りながら是は先づ神德の目出度き子細。又當社と播州室の明神とは同一體の神にておはす故。室の明神の神職の方唯今當宮へ參詣の由申す間。先づあれへ參り如何なる人々ぞ見申さうずる。誠に同一體にてあればこそ。室より此所へ遙々上られたり。去りながらどこ許にぞ。大方このあたりにてあらう。さればこそ是に居りやるよ。先づあれへ參らう。是は當社明神に仕へ申す末社なるが。此所への參詣目出度う存ずる。玆許に逗留の內何の慰みもなうては如何な。面白くはなくとも何ぞ一曲致さうずるか。やあ。あゝでおりやる。尤もな流石室の明神の神職なるぞ。何ぞ一曲致さうずるかと申したれば。よからうと思はるゝ心やらん。ほつくり〳〵とうなづかれたが何をしようぞ。いや思ひ出だした。此前一さし舞ふた事のある間。急いで是を奏(かな)でうずる。

謠「目出度かりける時とかや。あら〳〵目出度や〳〵な。かゝる目出度き折柄なれば。末社の神も悅び勇み。是迄なりとて末社の神は。是までなりとて末社の神は。本の社に歸りけり。



装束附（賀茂）		
ワキ	室ノ明神 官神	大臣烏帽子　赤上頭掛　着附厚板 白大口　袷狩衣　繍紋腰帯　扇
ワキツレ	従者二人	大臣烏帽子　萠黄上頭掛　着附厚板 白大口　赤袷狩衣　繍紋腰帯　扇
ツレ	女	面、連面　鬘　鬘帯　襟赤 着附摺箔　唐織着流
前シテ	女	面、増　鬘　鬘帯　襟赤白 着附摺箔　唐織着流
後ツレ	天女	面、連面　鬘　鬘帯　黒垂　天冠 襟赤　着附摺箔　白大口　紫長絹 縫腰帯　天女扇
後シテ	別雷神	面、大飛出　唐冠　赤頭　色鉢巻 襟縹　着附段厚板　赤地半切 袷狩衣　繍紋腰帯
作物		角臺（矢立）　幣
小道具		水桶（賀茂用）二

ワキ神主
ワキツレ二人上
眞次第
ツヨク
拍子二合

朗カニサラリ

清き水上尋ねて

素謡座席順
ワシツ天
キテレ女

やゝ清き水上尋ねてやゝ賀茂の宮居に參らん

ワキ詞 確カリサラリ

そもそもこれは播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の賀茂と。當社室の明神とは體にて

ぶ座ゆへどもも来だ參詣申さずゆ

程に。この度思ひ立ち都の賀茂へと急ぎい（確カリメニ 三人道行上ニ 元〈戻シ〉）「播磨潟。室のとぼ（ヤ）（ガルター）（ム）（ゴニ）その曙に。室のとぼその曙に。立つ旅衣色染むる飾磨の徒歩（ヒサカタ）（ソ）（シカ）（マ）（カチ）路行く舟も。上る雲居や久方の。（ガ）（ヒサカタ）（ボ）（クモ）（ヒサカタ）月の都の山陰の。賀茂の宮居に着きにけり（ヤマカゲ）（ヒ）（ヤ）（カ）（ヤ）（ヤ）（ヤ

○小謡

あれど。命の程は千早振。神に歩
みを。運ぶ身の宮居曇らぬ。心かな

下歌（中ヒルヲカヘ閑カニ）

頼む誓ひはこの神によるべの。水
を汲まうよ（拍子合）

上歌（朝カラスラリ）

○手洗の。聲も
涼しき夏陰や。聲も涼しき夏
陰や。乳の森の梢より。初音ふり
行く時鳥なほ過ぎがてに行きやら

（上）で。今一通り村雨の。雲もかげろふ
夕づく日。夏なほき水の川隈汲まず
とも影は。うとからじ汲まずとも
影はうとからじ。（ワキ詞）いかにこれなる
水汲む女性に尋ね申すべき事の
中さぬ御事なり。いづくよりの

（閑カニ）シテ

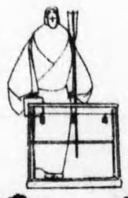
これはこのあたりにては見馴れ

ぼ参詣にていぞ「げによく」ぼ覧じいものかな。これは播州室の明神の神職の者にていが。始めて當社に参りていまづまづこれなる川邊を見れば。新しく壇を築き。白木綿に白羽の矢を立て。剰へ渇仰の氣色見えたり。こは

そも何と申したる事にていぞ「さては室の明神よりのぼ参詣にていぞや。これなる御矢は當社のぼ神體とも。ぼ神物とも。ただこの御矢の御事なり。あからさまなる御事なりとも。渇仰申させ給ひへ」「げにありがたき御事かな。さて

さて當社の神秘に於て様々あるべ
きそのうちに。わきてこの矢の御謂（一詞）
れ。委しく語り給ふべし　シテ（閑カニ確カリト）「然るて神
の御事をあざあざくは申さねど
も。あらあら（義を）顕すべし。昔この（語 ケヲカヘスラリ）
賀茂の里に。秦の氏女といひし人。
朝な夕なこの川邊に出で。水を

汲み神に手向けけるに。或時川上
より白羽の矢一つ流れ来り。この水
桶に留まりしを。取りて帰り庵の
軒にさす。主思はず懐胎し男子
を生みぬ。この子三歳と申しし時。
人々圓居して。父はと問へば。この
矢を指して向ひしに。この矢即ち



鳴る雷となり。天に上り神となる。
別雷の神これなり（確カリメニ）「その母市子も神となりて。賀茂三所の神所とかや、「さやうに申せば憚り（ツレ二人）の。眞の神秘は愚かなる身に雜へはいかにとも。いさ白眞弓やたけの人の。治めん市代を告げ白羽

「中」の八百萬代の。末までも。弓筆に殘す。心なり「よくよく（ロヲカル上ニ）、「よくよく（ロヲカル上ニ）、同けばありがたやさてそその矢は上る代の。今末の代にあたらぬ矢までも。市神體なる謂れは如何に「げによく不審し給へども。滿てはあらじ何事も「心からにて澄むも濁るも「同じ（ロヲカル上ニ）

流れの様ざに「賀茂の川瀬も変る名の「下は白川「上は賀茂川「変る名の

シテ「又そのうちにも

○小謡

上歌同和

伸ンビリサフリ

拍子三合

石川や。瀬見のふ川の清ければ。月も流れを尋ねてそ

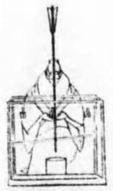
月も流れを尋ねてそ

瀬見のふ川の清ければ。月も流れを尋ねてそ。澄むも濁るも同じ江の浅からぬ心もて。何疑ひのあるべき。年の矢の。早くも過ぐる、光陰惜しみても帰らぬはもとの水。流れはよも書きづ絶えぜぬぞ。手向なりける。いざいざ水を汲まうよ

○獨吟

いざいざ水を汲まうよ。汲むや心もいさぎよき。賀茂の川瀬の水上は。如何なるところなるらん。いづくとか。

岩根松が根凄ぎ来る。瀧つ流れは、
白玉の音ある水や貴船川「水も
無く見えし大堰川それは紅葉
の雨と降る「嵐の戸無瀬なる
波も名にや流るらん「清瀧川
の水汲まば。高嶺の深雪解けぬ
べき「朝日待ちあて汲まうよ



地「汲まぬ音羽の瀧波は「受けて頭の
雪とのみ 地「戴く桶も「身の上と
同 誰も知れ老いらくの暮るも同じ
程なさけなの日も夢の現ぞと。
うつろ影はありながら。濁りなく
ぞ水掬ぶの神の心。汲まうよ神の
御心汲まうよ。「げにありがたき御

○切迄雜子

事かなかやうに安〜く語り給へ。御身は如何なる人やらん。○誰とは今はおろかなり。汝知らずや神慮に逐き。カル上ショクカリメニ 拍子三合ハズ

迄へ給はゞ君を守りの。この神徳を告げ知らしめんと。現れ出でゝ

同上 困カメニ 確カリ

拍子三合 恥かしやわが姿。恥かしやわが姿。

の。眞を現さば淺ましやなあさま

よし名はかりは白眞弓の

にやなりなんよ〜名ばかりは白眞弓のやごとなき神ぞかし。カシテ進ム心 木綿四手に立ち紛れて神隠れになりにけりや。神隠れになりにけり 中入來序間

後ツレ天女上 出端 拍子三合ハズ

後ツレの出

あらありがたの折からやなわれとの宮居に地を占めて。法界無縁の衆生をだに。子と思〜見そなはす。序祖の

神德仰ぐべしやな。曇らぬ御代を。守
るなり 地上 「守るべ〜守るべやな。君の惠
みも今この時 天女 「時至るなり時いたる
地上 「感應あれば影向微妙の。相好莊嚴
拍子合 運ビ付ケ
目のあたりに。ありがたや 天女舞 歌上ヲ返
上歌同
賀茂の山並御手洗の影。賀茂の
山並御手洗の影。映り映ろ〜緑

の袖を。水に浸して。涼みとる。涼み
とる。裳裾を潤す折からに。山河
草木動搖して。目のあたりなる別
雷の。神體來現し給へり
後シテ上 別雷神 早笛 「われはこれ。玉城を守る君臣の道。別
雷の神なり 地 「或は諸天善神となつ
て。虛空に飛行し 「又は國土を垂跡

裳裾を潤す折からに

後シテの出

○仕舞

風雨隨時の市空の雲居

宿る程だになる雷の

の方便（地上）「和光同塵結縁の姿あら（元ヲカケ進ム心）
ありがたの御事や（大キクノリラ外ス心）な（シテ上）働（サキ返ヤラ）○「風雨隨時（確カリ）
の市空の雲居（歩返ヤラ）風雨隨時の市空
の雲居（シテ）「別雷（確カリ）の雲霧を穿ち（シテ中ニ強ク）「宿る
（地）「光稲妻の稲葉の露にも（サラリ）
程だになる雷の（地上サラリ）「雨を起して降り（段々サラリ）
くる足音は（シテ中ニ確カリ）「ほろほろ（同）ほろほろ

とごろとごろと踏みとごろかす

市祖の神は乱の森に

とごろとごろと踏みとごろかす。鳴神（上元）
の鼓の時も至れば五穀成就も
國ざを守護し。治まる時にはこの
神徳と。威光を顯しおはしまして。
市祖の神は。乱の森に。飛び去り
飛び去り入らせ給へばなほ立ち添
ふや。雲霧を。別雷の。神も天路に

攀ぢよりて。神も天路に攀ぢ上つて。虚空にとらせ給ひけり。

俊寛

世阿彌元清作

曲柄　四番目（略二番目）
季節　九月
稽古順　九番習　高等二級
所　大隅國大島郡十島村硫黄島

梗概

法勝寺の僧都俊寛（シテ）、丹波少將成經（ツレ）、平判官康頼（ツレ）の三人は平家の討滅を謀りて事顯れ、流されて薩摩潟鬼界が島にあり。三人の中、成經、康頼の二人は佛法を信じて、この島にも三熊野を勸請して歸洛を祈りけるが、俊寛はこれに加はらず。今日も二人の參詣せる所に水桶を持ち來り、道迎への酒を携へたりと戯れゐたり。

都にては中宮御産御祈りの爲に非常の大赦行はれて、成經、康頼も亦その列に入り、乃ち赦免の使（ワキ）この地に下れり。俊寛喜びて赦免狀を康頼に渡ししに、俊寛の名は漏れたり。罪も同じ罪、配所も同じ配所なるに、かゝる理なしと、俊寛自ら狀を取りて繰り返し見れど、その名のなきに、悲歎やる方なし。既にして時移れば、赦免使成經等二人を船に乘せて纜を解く。俊寛船にとりつきて同船を乞へど、使はこれを許さず。船は次第に遠ざかり行きて、俊寛一人悄然として島に留まりぬ。

謡ひ方

九番習の内にして輕き曲に非ず、孤島に流されたる雄僧の憔悴、悲歎と氣慨とを顯はさゞるべからず、全體に位は閑かに抑へて、淋しき内にしつとりと、其間に强みを含めて謡ふ。

△**シテ**　出の一聲は調子を抑へて、極閑かに力を籠めて謡ひ出し、「玉兎晝眠る」と少し寛たりめに、ツレとの掛合は調子を抑へて閑かに、初同後の掛合はかゝつてさらりめに、緩急ありよく傍註を見るべし。「こはいかに」とかゝつてさらりと確かり、クドキはだれぬ様に運びを附け、「僧都も船に」よりかゝつて確かりと、「さすが命の」より弱吟にて閑かに、ロンギは氣を變へ調子を抑へて、閑かに沈んで謡ふ。

△**ツレ成經**　ツレと雖も曲柄により餘り輕く謡はず、康頼と調子の合ふ様に謡ふ。

△**ツレ康頼**　成經より位を稍重くし、次第の出は調子を抑へめに閑かに出で、サシ道行は閑かの内にさらりめに、浮きやかにならぬ様に、シテと三人の連吟はシテの位に從ひ、「何

何中宮御産の」と、文は一寸間を置きてはつきりと謠ひ、「御名はあらばこそ」と手強くならぬ様にかゝつてさらりと、ロンギはしつとりと謠ふ。

△**ワキ**　前は餘り位を取らず閑かに謠ふ、後は氣を替へ、手強く大きくさらりと謠ひ出し、シテとの掛合も手強く確かりと、「情も知らぬ舟子ども」より勢ひを込めて一層手強く、ロンギはしつとりとツレと調子を合はせて謠ふべし。

△**地**　始めの「なる身の果の」とシテの調子を受けて、抑へて閑かに、「飲むからに」上歌は調子を充分抑へて閑かに出で、しつとりと寂しく謠ふ、クセは閑かに出で、居着かぬ様に哀なる心にて、上端よりは運びを附け少しく引立て緩急多し、傍註を見るべし、「もとの渚に」とかゝつて氣の抜けぬ様にさらりと附け、「聲も惜しまず」ととくと閑め、「待てよ〳〵」と閑かに重んもりと附け、段々と閑めてしつとりと謠ひ納む。

能の異式（小書）

木葉傳（このは）　―「落つる木の葉の盃」の形が變る。

語　釋

相國　―太政大臣の異名。平清盛をさす。

中宮　―高倉天皇の御后、安德天皇の母后、建禮門院のこと。清盛の女なり。

成經　―大納言藤原成親の子、正三位參議となる。母は參議親隆の女なり。赦免の時は二十二歳。建仁二年薨ず。

康頼　―桓武天皇の後胤にて、從五位平判官入道性照といふ。歸洛して東山双林寺に籠居す。寶物集を作る。頼朝に召出され、義朝の廟所野間の内海に遣し御堂の承仕法師となり、則爰にて寂す。

鬼界が島　―薩摩國の沖にある島嶼の一つ、現今は大島郡喜界村と稱し、又一般に喜界島と呼ぶ。

九十九所　―京都より紀伊國熊野までの間に、九十九箇所の遙拜所あり。

浦の濱木綿　―拾遺集第十一卷、戀歌一に載す柿本人麿の歌「みくま野の浦のはまゆふ百重なす心は思へど唯に逢はぬかも」とあり。濱木綿は、莖の皮の多く重なれるものなれば、百重とは言へるなり。俗に濱をもといふ。七八月に白花開く、卷丹の花の形に似たり。秋實を結び花咲きたる跡に數顆みのる、大さ胡桃の如し。内に核なく白肉あり。

眞砂を取りて散米に　―源平盛衰記に、「康頼入道は小竹を切て串とし、浦の濱ゆふを御幣に挾み、蒐草（かりくさ）といふ草を四手にたれ、清き砂を散供として、名句祭文を讀上て一時の祝言を申す」云々とあり。惣じて散米とは、神事を行ふ時、神前に撒き散らす米をいふ。例へば切麻の如し。雜阿含經に、「昔、印度に二人の童子あり。一人を閻耶と名づけ、亦一人を昆閻耶と名づく。釋迦世尊の威容を拜し、實心に恭敬して細砂を執つて愛に喪し以て世尊に供養す。此功德に由て滅後百年に阿育王となり世に出づ」とあり。

冥きより　―法華經に、「從レ冥入二於冥一」とあるによる拾遺集第二十卷、哀傷歌に載す和泉式部の歌、「くらきより暗き道にぞ入りにけるはるかに照らせ山の端の月」とあり。これも法華經の句によりしものなり。

玉兎晝眠る雲母の地　―玉兎は月の異名、雲母は「きらゝ」なり。仙人は雲母を食するものなる故に、仙界を雲母の地といふ。月の晝間、仙界に休息する意なり。

金鷄夜宿す不萠の枝　―金鷄は金烏ともいふ、日の異名。日は萠え出でもせぬ木の枝に夜中宿る意なり。

寒蟬云々　―「寒蟬抱二古木一鳴盡不レ回レ頭」　これは梅花無盡藏の詩。

俊寛　―法勝寺執行、村上天皇第七子二品中務具平親王六代の後葉、京極源大納言雅俊卿の孫、仁和寺法師寛雅の子なり。治承三年三十七歳にて歿せり。

道迎へのそのために云々　―神詣して歸る人を祝ひて、酒など持ちて途中まで出迎ふること。伊勢參宮に酒迎へとてするに同じ。

竹葉　―酒の異名。

醴酒（れいしゅ）　―祭の始に地にそゝぎて、以て神を祭るに用ふる酒をいふ。

彭祖　―列仙傳に、「彭祖菊を服して壽を長くす。其年七百餘歳、顏色壯にて十七八歳の如し」とあり。

濡れて干す山路の菊の云々　―古今集第五卷、秋歌下に載す、素性法師の歌、「仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる」と詞書して、「ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれはへにけむ」とあり。歌意は、仙人の住居に往きし其山路の菊の露に、着物の濡れたのを乾す僅の間と思ひしに、何時の間に千年を過した事であらうとの意。

法勝寺　―京都市岡崎町。今の動物園附近が其址なりと云ふ。

法成寺　―拾芥抄に、「近衞北、京極東、御堂關白治安三年七月供養矣」とあれど、今は無し。

喜見城　―忉利天主帝釋の住む所。

五衰滅色の秋　―天上界の樂は、人間世界に勝ること千萬なりと雖も、なほこの五衰あり。而して五衰には、大小の二種あり。大の五衰とは、一に衣服垢穢し、二に頭上の花萎み、三に腋下流汗し、四に身體臭穢し、五に本座を樂しまざるこれなり。小の五衰とは、一に樂聲起らず、二に身光忽ち滅し、三に浴水身に著き、四に境に著して捨てず、五に眼目屢々瞬くこれなり。是れ天人の果報盡滅するの相なれば、五衰滅色

といふ。この衰むべき天人の末期を、萬木凋落の淋しき秋に喩へ、五衰滅色の秋とは云ふなり。白氏文集第十五、旅望に、「萬物秋霜能壞レ色、四時冬日最凋年」とある句はこれをさす。

流るゝも又涙川云々 ― 古今集第十一卷、戀歌一に載す讀人不知の歌、「涙川なに水上をたづねけん物思ふ時の我身なりけり」とあり。歌意は、涙川の水上を餘所にばかりどうして尋ねたことか、よく見ればその水上は戀故に物を思ふ時の自身の上で、涙がこのやうに出るとの意。

赦免狀 ― 平家物語に、赦免狀の文言をあけて曰く、「爲二中宮御產御祈一儀レ被レ行二非常大赦一 薩摩方硫黃島流人前少將藤原朝臣成經並平判官康頼法師可レ令二歸參一之由御氣色所レ候也依執達如レ件」とあり。

時を感じては花も涙をそゝぎ云々 ― 杜子美詩に、「感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心」とあり。詩意は、何事にても感ずることあるときは、花にも涙をそゝぎ、人の別れを恨む折は、鳥の鳴くを聞くにも心を驚かすといふ意。

天地を動かし鬼神も感をなす ― 古今集漢文序に、「動二天地一感二鬼神一化二人倫一和二夫婦一莫レ宜二於和歌一矣」とあり。即ち天の德は地にあらはれ、地の德は天にあらはれ、天地の德は人にあらはる。天地は我をひらき、我は天地をひらくものなり。然れば志を述べ心を感ずる處天地を動かすなり。悉曇に、天はウなり、地はタなり、故に天地を動かし鬼神を感ぜしむるは歌なり。鬼神は魂の義也、天の魂を神といひ、地の魂を祇といひ、人の魂を鬼と云ふなり。禮記に、「鬼者精魂所レ歸聖人之精氣謂二之神一賢知之精氣謂二之鬼一矣」とあり。

禮紙 ― 書狀の上を卷く白紙、更に其上に包み紙を用ふ。

松浦佐用姫 ― 萬葉集第五卷、「大伴佐提比古良子、特被二朝命一、奉二使藩國一、艤棹言歸、稍二蒼波一、妾也松浦佐用嬪面、嗟二此別易一、即登二高山之嶺一、遙望二離去之船一、悵然斷レ腸、黯然銷レ魂、遂脫二領巾一麾レ之、傍者莫レ不二流涕一、因號二此山一曰二領巾麾之嶺一也」とあり。

聞くやいかにと云々 ― 新古今集第十三卷、戀歌三に載す寄レ風戀、宮內卿の歌、「聞くやいかにうはの空なる風だにもまつに音するならひありとは」とあり。歌意は、空を吹く浮氣な風でも待つとさへいへば訪づるなりといふことを、あなたはお聞き及びになつたかどうかとの意。即ち待つて居るに訪はれざる人の浮薄を詰るなり。

間狂言

ワキの從者。

（ワキ）御前に候（シカゝ）畏つて候。如何に追風が吹き申し候間。お船に召され候へ（ワキ）（シカゝ）○是は早鬼界が島に着き申して候。

裝束附（俊寛）			
ワキ	赦免使	着附段熨斗目	素袍上下
		小刀	鎭扇
ツレ	丹波少將成經	直面	襟崩黃
		着附無地熨斗目	
		縷水衣	繡紋腰帶
			扇
ツレ	平判官入道康頼	直面	襟崩黃
			角帽子
		着附無地熨斗目	
		水衣	緞子腰帶
		數珠	扇
シテ	俊寛	面、俊寛	角帽子（沙門）
			襟淺黃
		着附無地熨斗目	茶水衣
		緞子腰帶	荒和布腰簑
			扇
作物	舟	纜	棹
			文
小道具	水桶（木地）		

俊寛

ワキ 右衆

ワキ赦免使詞寛タリ

「これは相國に仕へ申す者にてゐ。さて

もこの度中宮懐産の御祈りのため

に。非常の大赦行はるゝにより。國々

の流人赦免ある。中にも鬼界が島の

流人の中。丹波の少將成經。平判官

康頼二人赦免の御使をば。某承つて

素謡座席順

ワシ康成

キテ頼經

ツレ成経康頼二人 困カメア

次オ 神を硫黄が島なれば。神を硫黄が
ヨワク 拍子二合

島なれば。願ひも三つの山ならん

サシ上 気ヲカヘスラリ

これは九州薩摩潟。鬼界が島の
拍子三合

流人のうち 成経 丹波の少将成経

康頼 雇カリメニ

平判官入道康頼 二人が果にては
ワキ

なり。我等都にありし時。熊野詣

確カリメニ

鬼界が島へと急ぎは ワキ中入

ツレ二人次オ以下

詣三十三度の歩みをなさんと立願
野

せしに。その半ばにも數足らでかゝる

遠流の身となれば所願も空しく

はやなりぬ。せめてのなごりに

やこの島に三熊野を勧請申し。都

よりの道中の九十九所の王子まで

歌中 気ヲカヘ困カメニ

カヘテ 恋く順禮の神路に幣を捧げつ
拍子三合

上歌

○小謡

○てとても。同じ宮居と三熊野の。同じ宮居と三熊野の。浦の濱木綿一重なる。麻衣のしをるをたゞそのまゝの白衣にて。真砂を敷りて散米に。白木綿花の帝被して神に歩みを。運ぶ。なり神に歩みを運ぶ。なり。後の世を。待たで鬼界が島守と

シテ俊寛上ル

シテ一セイ ツヨク 柏子三合ハズ

シテ一セイ ツヨク

にぞ 前ヲ受ケニト其マヽ引キ廻シテ下ゲぞミツヾク

地 前ヲウケ

「なる身の果の。冥きより。「冥き。道にぞ。入りにける。サシ上 玉兎晝眠る雲母の地。金鷄夜宿す不蘭の枝。寒蟬枯木を抱きて。鳴き盡して頭を回らさず。俊寛が身の上に知られてこれまでは何のために御出でにて

康頼詞

「あれなるは俊寛にてわたりゐか。

いそ「早くも」シテ(閑カニ)怒めたり。道迎へのそのためにシテ酒を持ちて来りて

康頼(サラリ)「そも一酒とは竹葉のこの島にあるべきかと立ち寄り見れば。

立ち寄り見れば

心持シ 元ヲカヘ

やこれは水なり「これは」シテ(閑カニ)仰せにてゝへども。それ酒と申す事は。もとこれ薬の水なれば。醽酒にてなどなかるべき

康頼(成経)ヨワク「天カル上(サラリメニ)げにげにこれは理なり。頃は長月シテ(閑カニ)「時は重陽(チヤウヤウ)(閑カニ)」康頼(成経)「所は山路(サヘロ)」シテ(ショクヘ)「谷水の」シテ(確カリイロ)康頼(成経)ヨワク「彭祖(ホウソ)が七百歳(シチヨウ)を経しも。心を汲み上歌同 抑テシツトリ

○獨吟

元へ深谷(ミタニ)の水。飲むからに。げにも元へ戻シ 拍子三合○

薬と菊水の。げにも薬と菊水の。

山路の菊の露の間に

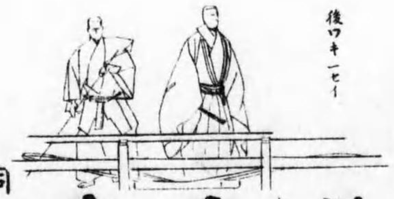
心の底も白衣の。濡れて干す。山路の菊の露の間に。われも千年を。

徑る心地する。配所はさてもいつまでぞ。春過ぎ夏たけて又秋暮れ冬の来るをも。草木の色ぞ知らずるや。あら恋しの昔や。思ひ出は何につけても。あはれ都にありし時は。

法勝寺法成寺たづ喜見城の春の花。今はいつしか引きかへて。五衰滅色

落つる木の葉の盃

後ワキ一セイ



詞 気ヲカヘカシテ

の秋なれや。落つる木の葉の盃。飲む酒は谷水の。流るゝも又涙川水上は。われなるものを。物思ふ時しもは。今こそ限りなりけれ。

後ワキ上一セイ 雇カリサライメ 拍子ニ合ハズ

早舟の心に叶ふ迅風にて。舟ぞやいとゞ勇むらん。

いかにこの島に流され人の。居座ゐか。都より赦免状を持ちて参りてゐ。

何々中宮御産の御祈りのために

急いで御拝見ハヘ「シテ 気ヲコメ あらありがたやゞ。
やがて康頼御覧ハヘ「康頼サラリ 何々中宮御産の
御祈りのために非常の大赦行はる
により。國々の流人赦免ある。中にも
鬼界が島の流人のうち。丹波の少
将成経。平判官入道康頼二人赦免
ある處なり「シテカツテ 何として俊寛をば讀

さては筆者の誤りか

み落し給ふぞ「康頼カケテサラリ 御名はあらばこそ。
赦免状の面を御覧ハヘ「シテ心持シカツテ鋭ク さては筆者
の誤りか「ワキカヽリヽニ いやゝ某都にて承りハも。康頼
成経二人は御供申せ。俊寛一人をばこの
島に残し申せとの御事にてハ
シテ上カツテ確カリ「ヨワク こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ
「ワ 配所。非常も同じ大赦なるにひとり

クドキ ハヤ

誓ひの網に漏れて。沈み果てなん
事はいかに　この程は三人一所に
ありつるだに。さても恐ろ〳〵凄ましき。
荒磯島に唯一人。離れて海士の捨草
の。波の藻屑の寄るべもなくてあら
れんものかあさまし〳〵や。歎くにかひも
渚の千鳥。泣くばかりなる。有様かな

名同 中シツトリ 下

拍子三合 ヤハ

時を感じては。花も涙を濺ぎ。別れを
恨みては。鳥も心を動かせり。もとより
もこの島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼
ある所にて。今生よりの冥途なりたと
ひ如何なる鬼なりとこのあはれなど
か知らざらん。天地を動かし鬼神も感
をなすなるも人のあはれなるものを。

この島の鳥獣も鳴くはわれを弔ふやうにて上（困カニ泪シテ）

さきに織みたる巻物を

らん。せめて思ひのあまりにや　さきに同じ（ウヘニ確カリ）

讀みたる巻物を。又引き披き同じあと

を。繰り返し繰り返し。見れども見れ

どもたゞ成経康頼と。書きたるその名

ばかりなり。もしも禮紙にやあるらん

と巻き返して見れども。僧都とも俊寛

夢になしこは夢か

覚めよ覚めよと現なき

とも書ける文字は更になしこは夢かさ

ても夢ならば。覚めよ覚めよと現なき。

（困ル心）

（ワキカル上）

（ツヨク）

（拍子ニ合ハズ）

俊寛が有様を見るこそあはれなりけれ

時刻移りて叶ふまじ。成経康頼二人

はは。お船に召されいへとよ

（成経康頼二人ヨワク）

かくてあるべき事ならねば。よその

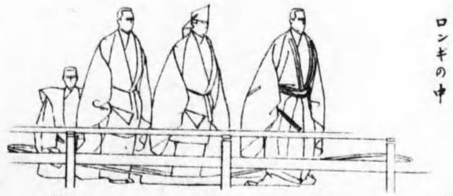
歎きをふり捨て。二人は船に乗らんとす

康頼の袂にとりつけば

シテ詞「僧都も船に乗らんとて。康頼の袂に
とりつけば（ロ半カル上）僧都は船にかなまじ
と。さもあらけなくいひければ（シテ詞）うた
てやな公の私といふ事のあれば。せめ
ては向ひの地までなりとも。情に乗
せてたび給へ（ロ上旦）「情も知らぬ舟子ども。
艪櫂をふり上げ打たんとす（シテ）さすが

纜に取りつき引きとむる

詞（手強）「命の悲しさに。又立ち帰り出で船の
纜に取りつき引きとむる（ロ）「舟人纜
押し切って。船を深みに押し出だす
（シテ上）「せん方波にゆられながら。ただ手を
合はせて船よなう（ロ手強）「船よといへど乗せ
ざれば（シテ）「力及ばず俊寛は（同上）もとの
渚にひれふして。松浦佐用姫もわが



身にはよもまさでと。聲も惜しまず泣
き居たり（甲 成經康賴ワキ 三人ロンギ上 元ヲカヘ閑カニスラリ）「痛はしの御事や。我等
都に上りなばよきやうに申し直し
つゝやがて帰洛はあるべし御心強く待
ち給へ（シテ上 抑テシシトリ）「帰洛を待てよとの。呼ばはる
聲も。岳かなる。頼みを松蔭に。音を泣
きゝて聞き居たり（三人上スラリ）「聞くやいかにと

ゆゝ波の。皆聲ゞに。後寛を（シテ閑カニ）「申し直
さば程もなく（三人サラリメ）「必ず帰洛あるべしや
（シテ閑カニ）「これは眞か（三人サラリメ）「なかなかに（シテ元ヲカケ閑カニ）「頼むぞよ
頼もしくて（同ト抑テ閑カニ）待てよ待てよといふ
聲も。姿も。（元ヲカヘ）次第に遠ざかる。沖つ波
の。岳かなる聲絶えて。船影も。人影も
消えて見えずなりにけり。跡消えて

松　風

觀阿彌清次作

曲　柄　三番目　鬘物
季　節　九月
稽古順　一級
所　攝津國神戸市須磨浦

梗概

諸國遊歷の僧(ワキ)西國行脚の途次、攝津の國須磨の浦に立ち寄り、由ありげなる磯邊の松を見て、松風、村雨の舊跡なりと聞き、經念佛して回向し、やがてとある鹽屋に一夜の宿を求めぬ。

さる程に二人の海士少女(シテ、ツレ)汐汲車を引きて汀に出で來り、はかなき世の業を歎きつゝも、秋の月の水に映る面白さにうち興じて、汐を桶に汲み入れ、汐屋に立ち歸りぬ。僧乃ち一宿を請ひ、先程磯邊にて松風、村雨を弔ひたる由を語れば、二人の海士少女、眞はわれ等こそその幽靈なれとうち明け、その昔、行平朝臣に召し出だされて、緒(かとり)の衣に空燒きする幸ひを得しが、三年の契り程もなく、行平は都に立ち歸り、間もなくこの世を早くし給ひぬと聞きしより、戀慕の亡執今もなほ晴れぬなりと語り、松風は殊に心も亂れて、形見の烏帽子狩衣を身につけて、思慕の情を舞に奏すと見しほどに、夜は明けて、二人の姿は夢と消え失せぬ。

謠ひ方

本三番目の閑かに美はしき曲にして、優麗を主とすれど、賤しき蜑乙女なれば上品に過ぎず、氣合心持等の變化もあれど、これに重きを置けば四番目物の樣になり、本三番目の位を失ふなれば、よく注意して謠ふべし。

△**シテ**　出の眞の一聲は初能、卽ち神祇物の外は此曲一番のみにて、彼は陽、これは陰なれば、調子は抑へても聲は美くしくしつとりと出で、サシは聲を內へ取り稍朗かめに、「面白や」と氣を替へ少しく晴れやかにさらりと、秋の淋しさを含みて、ツレとの掛合は氣を替へさらりめに、ロンギは伸んびりと朗かに、次のツレとの掛合は調子を內へ取りて閑かに、「げにや思ひ內にあれば」より愁傷の心にてしつとりと出で、クドキはだれぬ樣に、「三瀨川」と一寸間を置きしつとりと謠ひ出し、「あら嬉しや」と氣を變へ、朗かにはつきりと張りて、「いで參らう」より狂氣の心にて、ツレとの掛合晴れやかに稍さらりと、「稻葉の山の」と稍緩め締めて謠ひ、「それは」

と乗りて朗かに謠ふべし。

△**ツレ**　シテとの連吟はシテの位に從ひ、二の句は調子を高めてさらりと、ロンギ後の詞の掛合もさらりと、クドキ後のシテとの掛合は餘りさら〳〵と謠はず、シテより輕く謠ふ、切の掛合はさらりと謠ふべし。

△**ワキ**　位を重く取らず閑かに出で、「さては此松は」と一寸間を取り謠ひ、以下しつとりと、ロンギ後ツレとの掛合もしつとりと、「出家と申し」以下だれぬ樣に謠ふべし。

△**地**　初同はシテと調子を替へ閑かに出で、上歌は調子を張りめに心持多し、凡てしつとりと淋しく、二の同「寄せては」と氣を掛け、引立てゝさらりと出で、以下緩急多し、ロンギは氣を替へさらりめに朗かに出で、段々さらりと、「松風も村雨も」調子を變へさらりと出で段々と閑める心、上歌より引立てゝ閑かにたつぷりと、クセは抑へて出で、浮かぬ樣に閑かに、上端より伸びりと朗かに緩急あり、留を閑めて、「立ち別れ」と麗はしく大きく、「これはなつかし」とさらりと受け、朗かにうつきりと、大きく長閑に謠ふべし。

能の異式（小書）

見留　―　破の舞の留に橋掛へ行き、松を見込む形あり。

戯之舞　―　中之舞にて作り物の松を廻り、松に下げたる短冊を持ち、「立ち別れ」と今一度謠ひ、破の舞を拔き、切の形も變る。

五段の物着　―　物着を大小の會釋に合せて附けるものにて、物着方の習なり。

曲の出打切　―　クセ前「哀れに消えしうき身なり」の跡へ打切を入れる。

曲中の打切　―　上端の前に打切を入れる。

脇留　―　留をワキが留めるなり。

語　釋

須磨の浦　―　攝津國武庫郡、現今神戸市須磨。

波こゝもとや　―　源氏物語、須磨の卷に、「（上略）御前にいと人ずくなにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして枕をそばだてゝ、四方の嵐を聞きたまふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりにけり（下略）」とあるを引く。

心づくしの秋風に云々　―　源氏物語、須磨の卷に、「須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關ふき越ゆるといひけむ浦波、よる〳〵はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かゝるところの秋なりけり」とあるを引く。

關ふきこゆる　―　續古今集第十卷、羈旅歌に載す、中納言在原行平の歌、「旅人は袂すゞしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」とあり。

里離れなる云々　―　源氏物語、須磨の卷に、「かの須磨は、昔こそ人の住家などもありけれ。今はいと里ばなれ心すごくて、海士の家だにも稀になど聞き給へど」とあるを引く。

月より外は友もなし　―　金葉集第三卷、秋歌に載す法橋忠命の歌、「月はたびの友と言へる事を詠める」と詞書して、「草枕このたびねにぞおもひしる月より外のともなかりけり」とあり。唯一人心細き旅寢の枕に、月に古里の事など思ひ出でてよめる心なり。

汐汲車云々　―　潮を桶に汲み車に載せて運搬するいやしき體なり。雲玉集に載す歌に、「忘れてはからくも物を思ふかな汐汲車わづかなる世に」とあり。

かくばかり經がたく云々　―　拾遺集第八卷、雜歌上に載す藤原高光の歌、「法師にならんと思ひ立ち侍りけるころ月を見侍りて」と詞書して、「かくばかりへ難くみゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」とあるを引く。榮花物語に、高光は此歌をよみて其曉に家を出て、名を如覺法師と改め、吉野多武峯に籠りていみじう行ひけるよし記さる。

月の出汐　―　月の出る時刻にさす汐。

海士の捨草　―　海士の打ち捨てたる草。

海士の呼び聲　―　萬葉集第三卷、雜歌に載す、長忌寸意吉麻呂、應詔歌、「大宮之內二手所聞、網引爲跡、網子調流、海人之呼聲」卽ち「大宮の內まで聞ゆ網引すと網子調ふるあまの呼聲」とあるをいふ。

假の姿　―　人間の目に月と見ゆるは假の形。

野分　―　荒く吹く秋風のこと。

かゝる所の秋　―　秋は寂しき物なれば、須磨の浦によせてかくいへり。源氏物語、須磨の卷にある詞。前段に示せり。新拾遺集に載す歌に、「身にぞしむかゝる所のよはもまたなれぬ旅ねをすまの浦風」とあり。

汐衣　―　汐汲む時に着る衣。

女車　―　源氏物語、葵の卷に、「よき女房車多くて、雜々の人なき際を思ひ定めて、皆さしのけさする中に、網代の少しなれたる、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾汗衫（かさみ）など、物の色いと淸らにて、殊更にやつれたるけはひ著（しる）く見ゆる車二つなり。これは更にさやうにさしのけなどすべき御車にもあらずと、口ごはく手觸れさせず」云々とあるを引く。

四方の嵐も云々　―　源氏物語、須磨の卷にある詞。「波こゝもとや」の條にて示せり。

かたをなみ　―　萬葉集第六卷、神龜元年甲子冬十月五日幸二于紀伊國一時、山部宿彌赤人作歌、「若浦志、鹽滿來者、滿乎無

美、葦邊乎指天、多頭鳴渡」即ち「和歌の浦にしほみちくれば、かたをなみ葦邊をさして田鶴なきわたる」とあるを引く。

松島や雄島の海士の云々 ― 新古今集第四巻、秋歌上に載す鴨長明の歌「松しまや鹽くむあまの秋の袖月はもの思ふならひのみかは」とあり。歌意は、松島の海邊の秋夜、汐を汲み上る蜑の袖の上にも月影の宿るを見る、さては月影の宿るは、物思ふ人ばかりと思ひ居るにさにあらず、との意。又新古今集第十卷羈旅歌に載す、皇太后宮太夫藤原俊成の歌、「立ち歸りまたも來て見ん松島やをじまの苫屋波に荒らすな」とあり。歌意は、此松島のを島の景色は實に捨て難いものである、一度歸つても亦直ぐに見に來ようと思ふから、今日自分の泊つた此苫屋は、波に荒らされない樣にして置いてくれとの意。又新後撰集第十二卷、戀歌二に載す、遊義門院の歌に、「つれなくも猶逢ふ事を松島や小島の蜑と袖はぬれつゝ」とあり。

運ぶは遠き云々 ― 陸奥は遠けれど名は近しとの意。昔、嵯峨天皇の時融の大臣、千賀の浦の景を自邸に模造して、難波より汐を運ばせたる古事あり。千賀は今宮城縣宮城郡。

賤が鹽木を運びしは ― 鹽木は鹽を燒く薪木をいふ。續古今集第十五卷、戀歌五に載す、衣笠前內大臣藤原家良の歌に、「伊勢の海あまの藻鹽木こりもせで同じうらみに年ぞ經にける」とあり。

二見の浦 ― 伊勢國度會郡にあり。宇治山田市より北方三里なり。古今榮雅抄に、「天照大神此浦を御覽じて面白と御感有て、又重ねて御幸ありければ、二見の浦と云ふ」とあり。

松のむら立 ― 金葉集第三卷、雜歌上に載す大中臣輔弘の歌、「伊勢國二見浦にて詠める」と詞書して、「玉くしげ二見の浦にかひしげみまきゐに見ゆる松のむら立」とあり。まきゐといふ所は、二見の浦の附近にある地なれば、かけて詠みしなり。

鳴海潟 ― 尾張國愛知、知多兩郡の西なる內海をいふ。

鳴尾 ― 攝津國武庫郡にあり。

蘆の屋 ― 攝津國武庫郡にあり。伊勢物語に、「昔、津の國兎原(うはら)の郡蘆屋の里にしるよしして、いきて住みけり。むかしの歌に、「あしの屋のなだのしほやきいとまなみつげの小櫛もさゝずきにけり」とあり。現今の蘆屋なり。

月は一つ影は二つ云々 ― 續拾遺集第十九卷、釋敎歌に載す、讀人不知の歌、「影はまたあまたの水に宿れども澄みける月は二つともなし」とあり。華嚴經第二十三、兜率偈讚品に、「普現二十方刹一、其實無二二種一、譬如下淨滿月普現二一切水一、影像雖二無量一、本月未曾二上」とあるによる。

松の木柱に竹の垣 ― 源氏物語、須磨の卷に、「處のさま畫にかきたらんやうなるに、竹編める垣し渡して、石の橋、松の柱、疎なる物からをかし」とあり。白氏文集に、「石階松柱竹編墻」とあり。また水日集に、「山里は竹あめる垣石のはしおろそかなるぞ心とまれる」とあり。拾遺愚草に、「竹の垣松の柱は苔むせど花のあるじぞ春さそひける」とあるをいふ。

わざとも佗びてこそ ― 須磨は左遷に逢ひ、世に不平ある人の住む處なれば云ふ。

須磨の浦に藻鹽たれつゝ云々 ― 古今集第十八卷雜歌下に載す、在原行平の歌、「田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りける人につかはしける」と詞書して、「わくらはにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」とあり。歌意は、若し偶然にも訪ふて來る人もあるならば、其時貴方は、私が須磨の浦にて海士の仕業をして、大いに難儀をして居ると答へてくれとの意。

思ひ內にあれば ― 孟子、淳于髡に、「思有二於中一心形二於外一」とあるをいふ。

逆緣ながら ― わざ〳〵弔らひに來るにあらざるを云ふ。

執心の闇浮 ― 此世に心殘りありて悲しとの意。閻浮は此世卽ち人間界をさす。

こりずま云々 ― 源氏物語、須磨の卷に、「例の中納言の君の、私事のやうにて、中なるに、つれ〴〵と過ぎにし方の思ひたまへ出でらるゝにつけても、『こりずまの浦のみるめもゆかしきを鹽燒くあまやいかゞ思はむ』さま〴〵書きつくしたまふ言の葉、思ひやるべし」云々とあり。

行平 ― 阿保親王の御子にて在原業平の兄、正三位中納言に至る。仁和三年須磨に配流せらる。

月にも馴るゝ云々 ― 新後撰集第五卷秋歌下に載す、前大納言藤原爲氏の歌、「汐風の波かけ衣秋をへて月に馴れたる須磨の海士人」とあり。

鹽燒き衣 ― 鹽燒く海士の着る衣。

かとりのきぬの云々 ― かとりは、細糸にて薄く織りたる織物のこと。空燒(そらだき)とは、あたりをにほはす薰物の意。

巳の日の祓 ― 三月上旬の巳の日。

形見こそ今はあだなれ云々 ― 古今集第十四卷戀歌四に載す讀人不知の歌、「かたみこそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらましものを」とあり。歌意は、戀しい人の殘して置いた形見が、今は却つて自分のために敵である。これがなかつたなら少しは忘れる時もあるだらうに、この形見がある爲に、見る度に思ひ出して忘れられぬ、との意なり。古今實技抄に、「業平の許より形見にし給へとて、双紙を奉りける時、詠みて返し給ふ二條の后の御歌なり」云々と。古今素純抄に、「業平齊衡三年三月二日直子に遇て、三日攝津國へ下りしに、小車

の錦の文の守を形見に奉る、直子は業平に扇を與ふ、縦ひ射山の位に上るとも是をしるべに尋ねよとなり」云々と記せり。

宵々に脱ぎてわが寢る云々 ― 古今集第十二卷戀歌二に載す紀友則の歌、「よひ〳〵にぬぎてわがぬる狩ごろもかけて思はぬ時のまもなし」とあり。歌意は、毎夜自身が脱いで寢る狩衣は、衣桁にかけて置くが、其かけてと云ふやうに、心にかけて思はぬ日とては片時もないとの意。

枕よりあとより戀の云々 ― 古今集第十九卷、雜體、俳諧歌に載す、讀人不知の歌、「枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床中に居る」とあり。歌意は、夜寢て居ると枕の方からも脚の方からも、戀といふものが攻め立てゝくる故に、仕様がなく床の中に起きてうづくまつて居るとの意。

三瀨川絶えぬ涙の云々 ― 不敏にして此歌、何れの集にも見當らず、讀人も未だ考へられず、然れども歌意は、思ひ亂るる戀に死なば、絶えぬ涙の數積りて三瀨川の淵ともなるべしとの意なり。

あらうれしや ― 愁傷極度に迫つて心俄に狂する詞。

娑婆 ― 此世のこと。

立ち別れいなばの山の云々 ― 古今集第八卷、離別歌に載す在原行平の歌、「立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ」とあり。歌意は、自分は皆に別れて因幡の國へ行くが、その國の稻葉山に生えて居る松の名の様に、私を待つといふならば直に歸つて來よう、との意。

磯馴松 ― 波うちぎはに立てる松のこと。

關路 ― 昔は須磨に關所ありしが故にいふ。現今其址あり。

間狂言

所の者出で、ワキと行平のことを問答す。

(ワキ、シカケ)誰にて渡り候ぞ(ワキ、シカケ)さん候。あれに付き謂れのあるを語つて聞かせ申さうずる。昔行平の中納言と申す御方。當浦へ始めて御下向の刻。この在所に姉妹の海士のあるに御心を掛けられ。月の面白き折節はあの松の下にて御酒宴をなさるゝ。其時分村雨などのはら〳〵と致し候へば。折に觸れて二人の海士の名を。松風村雨と名付け給ふ。其後行平は都へ御上りあり。御おとづれのなかりし事を。姉妹の海士は是を恨み空しくなれば。二人の海士の舊跡とも存じ。かやうに札を打ち短冊を懸けられて候。お僧も逆縁ながら。弔ふて御通りあれかしと存ずる(ワキ、シカケ)尤もに候。

裝束附（松風）			
ワキ	旅僧	角帽子	着附無地熨斗目
		腰帶	扇
			數珠
			水衣
ツレ	村雨	面、連面	鬘
			鬘帶
		着附摺箔	紅地縫箔腰卷
		胴箔腰帶	扇
			袴赤
			白水衣
シテ	松風	面、若女	鬘
			鬘帶
		着附摺箔	紅地縫箔腰卷
		胴箔腰帶	鬘扇
			袴白二
			白水衣
		物着ニ	女小立烏帽子
			長絹
作物	丸臺	松立木	車
小道具	水桶（松風用）二		

松風

素謡座席順　ワシツ　キテレ

ワキ僧詞　裕タリ

「これは諸國一見の僧にてゝ。われ
未だ西國を見ずゝ程に。この度思
ひ立ち西國行脚と志してゝ。あら
嬉しゝや急ぎゝ程に。これははや
津の國須磨の浦とかゝ申しゝ。
又これなる磯邊を見れば。樣あり

又これなる磯邊を見れば

げなる松のけい。如何さま謂れのなき事はいまゞこのあたりの人に尋ねばやと思ひい（寛タリ）（言ヒカル上）（狂言）（指ニ合ハズ）さてはこの松は。古松風村雨とて。二人の海士の舊跡かや。痛はしやその身は土中に埋もれぬれども。名は殘る世のゝるしとて。變らぬ色の松一木。

（死ニ又ハ不ニ）（閑ル心）緑の秋を殘す事のあはれさよ。

（詞）かやうに經念佛ゝて弔ひいへば。げに秋の日の習ひとて程なう暮れて。あの山本の里までは程遠くい程にこれなる海士の塩屋に立ち寄り。（夜ヲ）夜を明かさばやと（確カリメニ）思ひい

（シテ女ニ人上来）（閑カニ仰ヘテ）（眞ニセイ）「汐汲車。わづかなる。浮

元文ニワ「ツレテ句ニ元文ノ「波てもとや
世に廻る。はかなさよ
二人ノ掛カミ抑ヘテ
須磨の浦　月さへ濡らす。袂かな
シテサシ上ニ伸ビリ
「心づくしの秋風に。海は少し遠け
れども。かの行平の中納言　開吹
き越ゆると詠め給へ。浦わの波の
夜々は。げに音近き海士の家。里
離れなる通ひ路の月より外は

友もなし　シテ上元ヲカヘスラリ「げにや浮世の業ながら。
殊に拙き海士小舟の　渡りかねたる
夢の世に。住むとやいはんうたかた
の。汐汲車寄るべなき。身は海士
人の。袖ともに。思ひを乾さぬ心かな
下歌同中シツトリ
カヘテ拍子ニ合ヤ
かくばかり經がたく見ゆる世の中
に。羨ましくも。澄む月の出汐を

○小謡

いざや。汲まうよ汐をいざや汲まうよ。上歌同、（閑カニ心持ヲ付ケ）影心恥かしきわが姿。影恥かしきわが姿。忍び車を引く汐の跡に残れる。（元ヘ戻シ）溜り水いつまでぞ。（気ヲカヘ）みは果つべき。野中の草の露ならば。日影に消えも失すべきに。これは磯邊に寄藻掻く。海士の

袖や朽ち増り行く。袖かな（閑メル心）朽ち増り行く袖かな。（シテサシ上ヲ伸ヒル）面白や朝（拍子二合ハズ）れても須磨の夕まぐれ。海士の呼び聲遠かにて。（二人ステリ）沖に小き漁舟の。影心遠かなる月の額。雁の姿や友千鳥。野分心（元ヘ戻シ）の風何れもげに。かくる所の秋なりけり。あら心すごの

夜すがらやな　シテ上「いざいざ汐を汲
まんとて。汀に満干の汐衣の
ツレ「袖を結んで肩にかけ　シテ「汐汲むた
めとは思へども　ツレ「よしそれとても
○小謡　シテ「女車　上歌同　○寄せては帰るかたをなみ。
寄せてては帰るかたをなみ。芦邊
の。田鶴こそは立ち騒げ四方の

女車

蘆邊の田鶴こそは

嵐も。音をへて夜寒何と過さん。
更け行く月こそさやかなれ。汲む
は影なれや。焼く塩煙心せよ。この
みなど海士人の憂き秋のみを
過さん。松島や雄島の海士の月
にだに影を汲むこそ心あれ影を
汲むこそ心あれ。○「運ぶは遠き陸

更け行く月こそさやかなれ

○獨吟

奥のその名や千賀の塩竈　賤
が塩木を運びしは阿漕が浦に
引く汐　地上　その伊勢の海の二見の
浦二度世にも出でばや　シテ上　松のむ
ら立ち霞む日に汐路や遠く鳴
海潟　地上　それは鳴海潟こそは鳴
尾の松蔭に月こそさはれ蘆の

屋　シテ上　優　地上　離の汐汲む憂き身ぞと人に
や。誰も黄楊の櫛　地上　さしくる汐を
汲み分けて。見れば月こそ櫛に
あれ　シテ　これにも月の入りたるや
地　嬉しやこれも月ありや　シテ　月は一つ
地　影は二つ満つ汐の夜の車に月
を載せて。憂しとも思はぬ汐路

塩屋の主の帰りて申す

申すなや。「塩屋の主の帰りて申。宿を借らばやと思ひ申。いかにこれなる塩屋の内へ案内申し申 「誰にてわたり申ぞ 「これは諸國一見の僧にて申。一夜の宿を御貸し申へ

「暫く御待ち申へ。主にその由申しいべし。いかに申し申。旅人の御入り申が。一夜のお宿を仰せ申 「餘りに見苦しき塩屋にて申程に。お宿の由申して申へば。塩屋の内見苦しく申程に。お宿は叶ふまじき由仰せ申 「いやいや見苦しきは苦しからず申。出家の事にて申へば。平に

主にその由申して申へば

皆く

一夜を明かさせて給はりゐへと
重ねて御申しゐへ（ツレ 確カリメニサラリ）いやかなひゐ
まじ（シテ色 ヒルヲカケ カル上ホ 拍子ニ合ズ）「暫く月の夜影に見奉れ
ば世を捨人よしよしかくる海士の
家。松の木柱に竹の垣。夜寒さこ
そと思へども。蘆火にあたりて
崩々お泊りあれと申しゐへ（ツレ 詞サラリ）「此方へ御

御志ありがたうゐ

入りゐへ（ワキスラリ）「あら嬉しやさらばかう
参らうずるにて（シテ優ニ）「始めよりお
宿参らせたくはゐひつれども。あ
まりに見苦しくゐ程にさていな
と申してゐ（ワキスラリ）「御志ありがたうゐ。
出家と申し旅といひ。泊りはつべ
き身ならねば。いづくを宿と定む

べき。その上この須磨の浦に心
あらん人は。わざとも侘びてこそ
住むべけれ。わくらはに問ふ人あら
ば須磨の浦に。藻塩たれつゝわび
と答へよと。行平も詠じ給ひしと
なり。又あの磯邊に一本の松のい
を人に尋ねてゝへば。松風村雨二人

の海士の舊跡とかや申しゝ程に。
遊縁ながら弔ひてこそ通りゝ
ひつれ。あら不思議や松風村雨の
事を申してゝへば。二人とも涙ぐ
傷ゝ。これは何と申したる事にて
ゝぞ「げにや思ひ内にあれば色
外に現れさもむらふぞやわくらはに

問人あらばの御物語。あまりに
なつかしうゐひて。なほ執心の間
浮の涙。ふたゝび袖を濡らしさむ
らふ。　早詞スラリ　「なほ執心の間浮の涙とは。
今はこの世になき人の言葉なり。又
わくらはの歌もなつかしいなどと
承りゐ。旁不審にゐへば。二人ともに

名を御名乗りゐへ　シテ二人上来ル　優ニ寛ニ　「恥かしや
申さんとすればわくらはに。言問
ふ人もなき跡の。世にしほじみて
こりずまのうらめしかりける心
ツレ下ノ二コリ　クギ中　サラリメニ
かな　この上は何をかさのみ色
むべき。これは過ぎつる夕暮に。あ
の松蔭の苔の下。せき跡弔はれ

参らせつる。松風村雨二人の女の
幽霊(閑ノ心)これまで来りたり(中サフリ)。さても行
平三年(ヒラミトセ)が程。御(イン)つれづれの市舟(ミヅフネ)
遊び(アソ)。月に心は須磨の浦夜汐(ヨウジホ)を
運ぶ(ハコ)海士(マ)乙女(ヲトメ)に。おとづ(イ)ひ選(エラ)はれ
参らせつる。折(ヲリ)にふれたる名なれ
やとて。松風(心)村雨と召(メ)されしより。

月にも馴るゝ須磨の海士の（シテ）塩
焼き衣。色替へて（シテ二人中運ビ入リ）藻の衣の。
空焼なり（中ハ仕ト、シテ中閑カニ）「かくて三年も過ぎ行
けば。行平都に上り給ひ（ツレ中サフリ）「いく程
なくて世を早う。去り給ひぬと聞
きしより（イヤ、シテ中カヘツテ閑カニ）「あら恋しやさるにて
も。いつの世の音づれを（同中ウケテスフリ）松風も（拍子ニ合）

行平ひてたび給へ

○獨吟
○切走囃子

村雨も袖のみ濡れてよしなやな。
身にも及ばぬ恋をさへ。須磨のあ
まりに。罪深し跡弔ひてたび給
へ。

上歌同

○恋草の。露も思ひも乱れつ
つ。露も思ひも乱れつ。心狂氣
になれ衣の。巳の日の。祓や木綿
四手の。神の助けも波の上あはれ

これを見る度に

に消え。憂き身なりあはれ古
を。思ひ出づればなつかしや。行平
の中納言三年はこに須磨の
浦。都へ上り給ひしがこの程の形
見とて。御立烏帽子狩衣を。残し
置き給へども。これを見る度にいや
増しの思ひ草葉末に結ぶ露の

なほ思ひこそは深けれ

シテ上 ハカニ伸ビリ

同 スラリ

同 ハカニ伸ビリ

同 ハカニ伸ビリ

同 ハカニ伸ビ

松風と召されむらんぞやいで
参らう「淺ましやその御心故に
こそ。執心の罪にも沈み給へ。妄婆
にての妄執をなほ。忘れ給はぬぞ
や。あれは松にてこそ。行平は
御入りもさむらはぬものを「うた
ての人のいひ事や。あの松こそは

行平よ。たとひ暫しは別るとも。
待つと〜角かば歸り来んと。つら
ね給ひし言の葉は如何に「げに
なう忘れてさむらふぞやたとひ
暫しは別るとも。待たば来んと
の言の葉を「こなたは忘れず松
風の立ち帰り来ん御音信

ツレ「つひにも向かば村雨の。袖暫しこそ濡るゝとも」シテ「まつにかはらで帰り来ば」ツレ「あら頼もしの」シテ「御歌や

○仕舞
○獨吟

同上

朝カニカシテ

立ち別れ 中之舞

生ふる。松とし向かば。今帰り来ん。

カヘル中ユタリ

それは因幡の遠山松。これはなつかし君とこに。須磨の浦わの松

拍子ニ合 ヤラ

これはなつかしき君とこに

の行平。立ち帰りこばわれも亦。

蔭に。いざ立ち寄りて。磯馴松の。

公持シリヲ外ス心

なつかしや 破之舞

狂ごて。須磨の高波はげしき夜

すがら。妄執の夢に見みゆるなり。

上

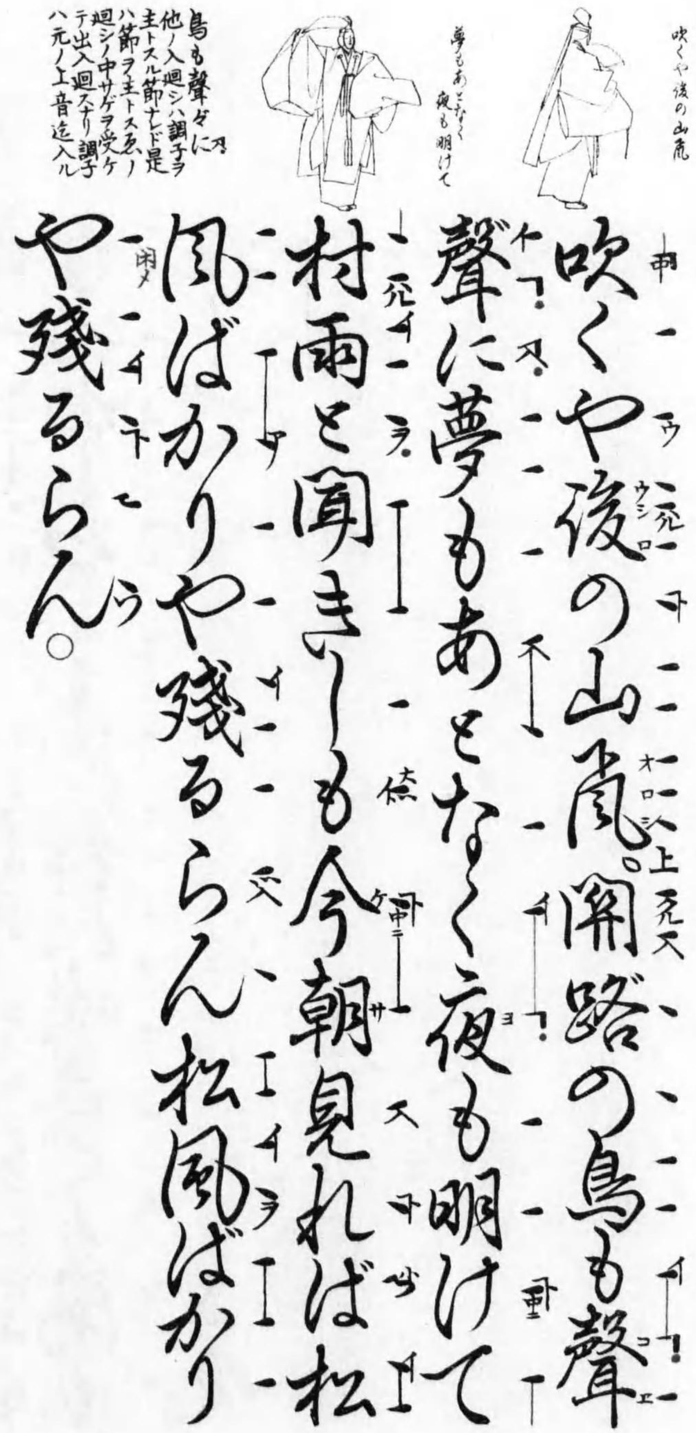
わが跡弔ひて。たび給へ。暇申して。

拍子ニ合 ノラズ

帰る波の音の。須磨の浦かけて

磯馴松のなつかしや

松に吹きくる風も



西行櫻

觀竹氏信作

梗概

京都下京の人々(ワキツレ)こゝかしこの花を眺め廻りて、今日はまた西山西行の庵室を訪れぬ。

西行(ワキ)は庵室の前なる老木の櫻を愛して、花も一木われも一人と、靜かに眺め暮らさんとしける處に、かく花見の人人の多勢出で來りしを心の外ながら、情なく追ひ歸さんもいかゞと、柴の戸を開かせて内に入れたり。さはれ、浮世を厭ふ山居を亂されたる煩はしさに、「花見んと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」と口ずさみて、さて都の人々とともに花の木蔭にまどろみぬ。

夜もや更けにけん、老木の花の精(シテ)白髪の老人と化して現れ出で、上人は「花のとが」と仰せられつれど、われは老木櫻の、花も少く枝も朽ちて、人を招かんとも思はざりしにといひ開き、上人の御値遇こそ嬉しけれと、老足の覺束なくも舞を奏しけるが、夜もほのぼのと明け行けば、西行の夢も覺めやしけん、翁の姿は跡なく消え失せぬ。

曲柄　四番目(略三番目)
季節　三月
稽古順　準高等
所　京都市右京區松尾町上山田西行庵

謡ひ方

此曲は木賊、遊行柳と共に、三老人と言はれ重き曲なり、遊行柳は柳の精、これは櫻の精なれど、共に古木の老人とて總じて位は閑かに重んもりと、佗びて淋しき内に稍はんなりとしたる處あるべし、本來は四番目以下なれど、略には三番目となるも、女物の三番目と位も異なるを忘るべからず。

△**シテ**　調子は抑へて強く出で、和弱吟の替る處大切なり、ワキとの掛合は閑かに重くして荒らくならぬ樣、「有難や上人の」と氣を變へて落着を附け、サシは閑かに浮かぬやう、上端も調子高くならぬ樣に、以下締めて凡て閑かに、「夢は覺めにけり」と氣を變へ、乘らずに閑かに謡ふべし。

△**ワキ**　西行上人なれば、サシの出は庵室にて獨言の物寂たる趣にて、調子を抑へて確かりと位を取り謡ひ出し、以下だれぬ樣に、狂言との掛合は輕めに謡ふ。「凡そ洛陽の花盛り」と確かりと閑かに、ワキツレとの掛合は位を保ちしつとりと、シテとの掛合になりてさらりめに、シテの位を奪はぬ樣に謡

ふべし。

△**ワキツレ**　素謡にては一人にて謡ふ、餘り位を取らずさらりと朗かに謡ひ出し、道行も晴れやかにワキとの掛合は朗かにさらりと謡ふべし。

△**地**　初同は閑かの内にさらりと朗かに出で、二の同はしつとりと、「恥かしや」と調子を抑へて、老人の弱々と寂しき心にて高くならぬ様に、クリは朗かと雖も花やかならぬ様に、サシも寂しき氣を失はず、クセは強吟にて極閑かに重く謡ひ出し、だれぬ様に確かりと、切は乗地なれども走らぬ様にしつくりと、「夢は覺めにけり」と乗らずにむつくりと、段々夜の白み渡り、翁の消える姿にて謡ひ納むべし。

能の異式（小書）

彩色傳　―　舞がなくなりイロエとなる。

杖の舞　―　序の舞を杖突きて舞ふなり。

比多杖傳

脇留

語　釋

西行法師　―　田原藤太秀郷九代の孫、佐藤左衞門太夫藤原康清二男、從五位下右兵衞尉憲清と號す。鳥羽院北面侍四條家餘流、母大監物源清經女なり。憲清は、武藝の達人、歌道の名匠たり。愚秘抄に、「西行上人こそ此道の權者と覺え侍る、天子も常には無上の達者と思召して、柿本の再誕かなとのみ勅定ありしにぞ」云々とあり。保延六年十月事ありて遁世し、圓位房と號す。後大寶房西行と改む。建久元年庚戌二月十六日寂す。年七十三。辭世の歌に、「ねがはくは花の本にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」と詠めり。西行櫻は、京都西山大原野勝持寺にもあり。世に花の寺と稱す。

百千鳥さへづる春は云々　―　古今集第一卷、春歌上に載す、讀人不知の歌、「もゝち鳥さへづる春は物毎にあらたまれどもわれぞふりゆく」とあり。歌意は、鶯や其他のさまゞの鳥が盛んに鳴く春は、空の景色も草木の色も總て新しくなるのに却つて自身は年寄つて行くとの意。

春の花は上求本來の梢に現れ　―　淨土に向つて本來の菩提成佛を求むること、即ち菩薩大乘心の修道をさす上に菩提を求むるは自利の行なり。下に衆生を化度するは利他の行なり。二利併行して大道をなす、是れ菩薩の修行なり。去れば春の花は此心に現顯する意なり。名義集に、「賢首菩提此謂二之覺一薩埵此曰二衆生一以レ智上求二菩提一用レ悲下救二衆生一矣」とあるは是なり。

秋の月下化冥闇の水に云々　―　下化冥闇とは、人間界に對して心の冥闇なる衆生を善道に化益するをいふ。即ち前段の句に照して知るべし。

行く水に云々　―　朗詠集、納涼篇に載す、夏日閑避暑、源英明詩句中に、「池冷水無三伏夏一、松高風有二一聲秋一」とあり。詩意は、池の冷かなれば三伏の夏もなく、松の風も涼しく、やう〳〵秋の心地するとの意。三伏夏とは、夏至より後の第三の庚を初伏とし、第四の庚を仲伏とし、立秋の後の初庚を後伏とす。是を三伏と名づく。

櫻花咲きにけらしな云々　―　古今集第一卷春歌上に載す、紀貫之の歌、「さくら花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆる白雲」とあり。歌意は、櫻の花が意外に早く咲いたやうだ、あの山の間より白い雲が見えるとの意。白雲は櫻花を指す。

飛花落葉を觀じつゝ　―　花の散り、木の葉の落つるを見て無常を觀じ、死を出離して涅槃に到るなり。故に緣覺と稱し又辟支佛といふ。

花見んと群れつゝ人の云々　―　玉葉集に出づる西行法師の歌なり。歌意は、人の來れるを厭ふ心なり。あたらは、俗にあつたらといふ詞。

埋れ木の人知れぬ身と沈めども心の花は殘りけるぞや　―　西行法師の歌なりといふ。然れども何れの集にあるや未知なり。

浮世と見るも山と見るも云々　―　浮世とは在家の心、山とは山居の意、即ち一心三昧に佛道を修する人は、里にても山にても心の澄めることは同じである。故に浮世と見るも山と見るも唯その人の心の覺らざるが故であるとの意。

影くちびるを云々　―　朗詠集、花篇に載す、花光水上浮、菅原文時の詩句序に、「誰謂水無レ心、濃艶臨兮波變レ色、誰謂花不レ語、輕漾激兮影動レ唇」とあり。序意は、花の影の映るときは水の色を變じ、人の顏色の變ずるやうなり。波のたつときは花の影動いて、人の唇を動かすやうに見ゆとの意。

花檻前に笑んで云々　―　百聯抄解に、「花笑二檻前一聲未レ聞、鳥啼二林下一淚難レ盡」とあり。詩意は、花は咲けども聲なし、鳥は鳴けども淚は見えずといふ意。笑とは、花咲くことなり、即ち花の咲くのは人の笑ふに似たれども聲なしといふなり。

朝に落花を踏んで云々　―　白氏文集第三十三に載す詩句、「朝踏二落花一相伴出、暮隨二飛鳥一一時歸」とあり。詩意は、朝に花を踏んで李二賓客といふ知友を伴ひ出て、夕には飛鳥に從ひて同じく伴ひ歸るといふ意。

近衞殿の絲櫻　―　近衞殿とは、上立賣南小川の東に櫻御所ありし、近衞別邸にある櫻樹をさす。

見渡せば柳櫻をこき交ぜて云々　―　古今集第一卷、春歌上に載す、素性法師の歌、「花ざかりに京を見やりてよめる」と詞書して、「見渡せば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける」とあり。歌意は、斯樣に見渡すと、柳の綠と櫻

のほのかな紅が美しく混つて、京の景色はちやうど春の錦とでもいふべきであるとの意。

昔遍昭僧正の云々 ― 花頂山は、粟田山の南にあり。但し遍昭の住家は、山科の花山にて、花頂山にはあらず。

枯れにし鶴の林まで ― 鶴の林は東山の知恩院内にありしと。釋迦如來娑羅雙樹の中にて涅槃せしとき、此樹枯れ果てゝ白鶴の如くなれりと、涅槃經に說示しあるを引用す。

松吹く風の音羽山 ― 續後拾遺集第三卷、夏歌に載す、藤原實兼の歌、「夕されば松吹く風の音羽川あたりも涼し山の下道」とあるを引く。音羽山は清水寺の山の俚稱なり。

數添ふ時の鼓 ― 昔は一時毎に太鼓を打ちたればいふ。

得難きは時 ― 史記、齊世家、「逆旅之人曰、吾聞、時難レ得易レ失」とあり。

春宵一刻價千金 ― 「花有三清香一月有レ陰」これ蘇東坡の詩句、光廣の歌に、「おしめたゞ猶一時も春の夜は千々のこがねにかへん物かは」とあり。

花を踏んでは同じく惜しむ云々 ― 朗詠集、春夜、白居易の詩句、「性情懶慢如和親、門巷蕭條稱作隣、背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春、杏壇住僻雖レ宜レ病、芸閣官微不レ救レ貧、文行如レ君尙憔悴、不レ知霄漢待三何人一」とあり。庭に散り積れる花を踏んで、春の暮れ行くことを惜しむ意なり。

間狂言

能力。

（ワキ、シカ〻）是に候（ワキ、シカ〻）畏つて候。○（ワキツレ、シカ〻）誰にて渡り候ぞ（ワキツレ、シカ〻）御出で尤もにて候へども。當年は何と思し召し候やらん。花見禁制と仰せ出だされて候間。御見物はなるまじく候さりながら。御機嫌を以て申して見うずる間。それに暫く御待ち候へ。○如何に申し上げ候。花を見物申したきとて。若い衆の是まで御出でにて候。（ワキ、シカ〻）禁制の由申してござれども。よき樣に申してくれよとの御事に候間。さて申し上げ候（ワキ、シカ〻）畏つて御座る。一段の御機嫌に申し合はせた。此由を申さうずる。最前の人の渡り候か（ワキツレ、シカ〻）さあらばかう御通り候へ。

櫻付山

三尺角臺輪に、五尺八寸を柱とせる山を作り、葉を葺ける中に、櫻の造花を交ふ

引廻幕をめぐらし

雛子方着座の後、大小鼓前に出さる、即ち櫻の老木の意にて、幕を引けば中に老翁のシテ粛然として床几にかゝり居る

作物	シテ 老翁 櫻ノ精	ワキツレ 花見立衆四人	ワキ 西行上人	装束附（西行櫻）
山	面、皺尉　白地鉢巻　白垂 柳寂風折烏帽子　襟淺黄 着附小格子　色大口　單狩衣 繡紋腰帶　神扇	着附無地熨斗目　素袍　小刀　扇	角帽子　着附無地熨斗目又ハ小格子 黑水衣　腰帶　扇　數珠 （又ハ大口僧）	

素謡座席順

ワキツレ次第

ワキツレ次第 次第 ツヨク拍子二合

伸ンビリ

西行櫻

頃待ち得たる櫻狩頃待ち得たる

櫻狩山路の春に急がん

ワキツレ詞

かやうに者は。下京邊に住居仕る者にて候。さてもわれ春になりぬれば。

こゝかしこの花を眺め。さながら山野に日を送りぬ。昨日は東山地主

の櫻を見仕りてゐ。今日は又西山西行の庵室の花。盛りなる由承り及びゐ程に。花見の人々を伴ひ。唯今西山西行の庵室へと急ぎゐ百千鳥。囀る春は物毎に。囀る春は物毎にあらたまり行く日數經て。頃も彌生の。空なれ

確カリメニ　元〈京〉シ　四道行上弓　伸ヒヤカサラリ

ややよ留まりて花の友。知るも知らぬも諸共に。誰も花なる。心かな誰も花なる心かな　「急ぎゐ程に。これはや西行の庵室に着きてゐ。暫く皆々御待ちゐへ。某案内を申さうずるにてゐ。いかに案内申しゐ

元〈京〉シ　中　閑メル心　ヒラカ〈サラリ　元〈京〉シ

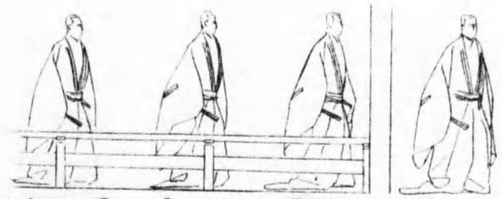
狂言「誰にてわたりゐぞ　「さんぬこれは

都方の者にてはいかこの御庵室の花。盛りなる由承り及び遥ゞこれまで参りてはそと御見せんへ（狂言）易き間の御事にてはへども禁制にてはさりながら。我機嫌と見てそと申して見うずるにて。暫く御待ちれへ（ト云）心得申しはべ（ト西行サシ上ヨワク）それ春の花は上求本（拍子三合ハズ）

それ春の花は以下

来の梢に現れ、秋の月下化冥闇の水に宿る。誰か知る行く水に。三伏の夏もなく。澗底の松の風。一聲の秋を催す事。草木國土おのづから。見佛聞法の。結縁たり。さりながら四の時にも勝れたるは花實の折なるべし。あら面白やゞ（狂言）日本一の我機嫌にてい

やがて申さう。いかに申しい。都より
この御庭の花を見たき由申して。
これまで皆々御出でにてい。（早詞裕タリ）「何と都より
と申して。この庵室の花を眺めんた
めに。これまで皆々来り給へと申すか
いひながら。西行が庵室の花花も
（狂言）「さんば」（早詞カメニ）「凡そ洛陽の花盛り。いづくもと
ありかを知られん事いかがなれども。
これまで遥々来りたる志と。見せでは
いかで帰すべき。あの柴垣の戸を
開き内へ入れいへ。（狂言）「畏つてい。いかに方々
申しい。よき折機嫌に申してい。へば。
見せ申せとの御事にてい程に。



櫻花咲きにけらしな足引の

ワキツレ四人が心上ツヨク「櫻花咲きにけらしな足引の山のかひより見えてまつこの木のもとに立ち寄れば」ワキヨク「われは又心ことなる花のもとに飛花落葉を観じつゝ独り心を澄ます處に」ワキツレ「貴賤群集の色々に心の花も盛んにて」ワキ「昔の春に

○小謡

ワキ ワキツレ 掛合 ツヨク

ワキ「閑かに」ワキツレ「隱れ所の山といへども帰る有様」ワキツレ「さながら花の都なれば」ワキ「捨人も。花には何と隱れ家の。所は嵯峨の奥なれども。春に訪はれて山までも浮世の嵯峨になるものをげにや捨てゝだに。この世の外はなきものをいづくか終の。

住家なるいづくか終の住家なる。

早詞

しかに面々これまで遥ゞ来り給へ志。

返す返すも優〳〵うこそ〳〵ありながら。

捨て〳〵住む世の友とては。花ひとり

なる木のもとに身には待たれぬ花の

友少し心の外なれば。花見んと群れ

つゝ人の来るのみぞ。あたら櫻のとがに

月になるも夜の木の本に

埋れ木の人知れぬ身て沈めども

はありける

同

あたら櫻の蔭暮れて。

月になる夜の木の本に。家路忘れて

諸共に今宵は花の下臥して夜と

ともに眺め明かさん

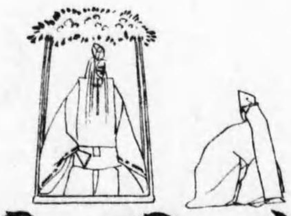
埋れ木の人

知れぬ身と沈めども心の花は殘りけ

るぞや。花見んと群れつゝ人の来る

のみぞ。あたら櫻のとがにはありける

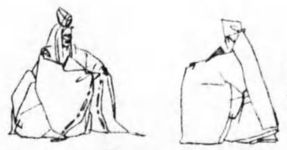
ロキカ上一スラリ
「不思議やな、朽ちたる花の空木より。
白髪の老人現れて。西行が歌を詠ず
る有様。さても不思議なる仁體なり
シテ問カニ
「これは夢中の翁なるが。今の詠歌の
心をなほも。尋ねんために来りたり
ロキカ上末スラリ
「そもや夢中の翁とは。夢に来れる
人なるべし。詞それにつきても唯今の。



詠歌の心を尋ねんとは。歌に不審のある
やらん。「いやシテウケテ寛タリ人の御歌に。何か不審
のあるべきなれども。群れつ人の来る
のみぞ。あたら櫻のとがにはありける。
詞気ヲカヘ
さて櫻のとがは何やらん。「いやこれは
たゞ浮世を厭ふ山住みなるに。貴賤群
集の厭はしき。心を少し詠ずるなり

シテ「恐れながらこの御意こそ。少し不審
に侍へとよ。浮世と見るも心と見るも。
たゞその人の心にあり。非情無心の草
木の。花に浮世のとがはあらじ ワキカツテスラリ「げに
げにこれは理なりさてさてかやう
に理をなす。御身は如何さま花木の
精か シテ「眞は花の精なるがこの身も

共に老木の櫻の ワキカル上「花もの言はぬ草
木なれども シテ「とがなきいはれをゆ
花の ワキ「影屋を シテ「動かすなり
○小謠 同上 ハツ九 ○恥かしや老木の。花も少なく枝
拍子三合 ハ「 ハ「 ハ「 ハ「 ハ「 ハ「 ハ「 ハ「
朽ちてあたら櫻の。とがのなき由
甲ウ 冗一ラ一地ト 冗ウ 冗 ヲ 冗 ヲ 冗 ヲ 冗 ヲ 冗 ヲ
を申し聞く花の。精にていなり。
冗一 ニ ニラ 冗 ニ 冗 ニ 冗 ニ 冗 ニ 冗 ニ
凡そ心なき草木も。花實のをり


皆成佛の序法なるべし

は忘れめや。草木國土皆成佛の序法なるべし。シテ詞「ありがたや上人の御値遇に引かれて。惠みの露あまねく。花檻前に笑んで聲未だ聞かず。鳥林下に啼いて涙盡き難し。地上「それ朝に落花を踏んで相伴つて出づ。夕べには飛鳥に隨つて一時に帰る

シテサシ上○獨吟○切迄囃子○九重に咲けども花の八重櫻　幾代の春を重ぬらん　「然るに花の名高きは　まづ初花を急ぐなる。近衛殿の糸櫻　○見渡せば。柳櫻をこき交ぜて。都は春の錦。燦爛たり。千本の櫻を植ゑ置きその色を。所の名に見する。千本の花盛り。雲路や

近衛殿の糸櫻

○仕舞

千本の櫻を植ゑ置きその色を

毘沙門堂の花盛り

雪に残るらん。毘沙門堂の花盛り。四王天の榮花もこれにはいかでまさるべき。

上なる黒谷

上なる黒谷。下河原昔遍昭僧正の「浮世を厭ひし華頂山」

同

「鷲の峯の寺山の花の色。枯れにし。鶴の林まで思ひ知られてあはれなり。清水寺の地主の花松

思ひ知られてあはれなり

戸無瀬に落つる

花は大堰川

吹く風の音羽山。こは又嵐山。戸無瀬に落つる。瀧つ波までも。花は大堰川。井堰に。雪やかゝるらん。

太鼓声合拍子三合入ル

「すはや數添ふ時の鼓

地上ウチエッタリ元又

「後夜の鐘の音。響音ぞ添ふ」

シテ詞ハカニ重ンモリ

「あら名残惜しの夜遊やな。惜しむべし惜しむべし。得難きは時。逢ひ難き

は友なるべし。春宵一刻値千金。花に清香月に影。春の夜の序之舞

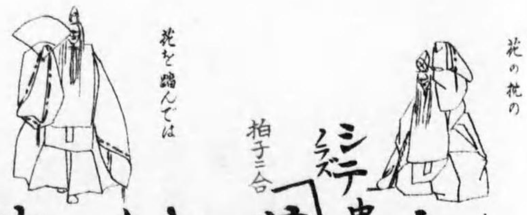
シテワカ上 「花の影より。明け初めて 地上 「鐘を

も待たぬ別れてそあれ。別れてそ

あれ別れてそあれ。シテ上 「待て暫し待

て暫し夜はまだ深きぞ 地 「白む

は花の影なりけり。よそはまだ小



倉の山陰に残る夜櫻の。花の枕の

シテ中 「夢は覺めにけり 夢は覺めに

拍子合 同上

けり嵐も雪も散り敷くや。花を

踏んでは同じく惜しむ少年の

春の夜は明けにけりや翁さびて

跡もなし翁さびて跡もなし。

浮舟

奥江元久作

曲柄　四番目（略三番目）
季節　不定
稽古順　三級
所　前、山城國宇治郡宇治
　　後、同愛宕郡大原村小野

梗概

諸國遊歷の僧（ワキ）初瀬より都に上らんとて、宇治の里に來れば、かなたより柴積舟に棹さして來る一人の女性（前シテ）あり。則ち言葉をかけて、この里に古如何なる人か住み給へると尋ぬれば、かしこき人々の上は知らねども、浮舟とやらんこそこの所には住みたれとて、源氏物語に記されたる浮舟の身の上、薫中將に思はれし身の、また兵部卿の宮に忍び尋ねられて、一筋に思ひ定むべき道に迷ひ、終にあとはかなくなりたる次第を語り、われはこの所には假に通ふもの、住所は大比叡の麓小野の里なれば、都のつてに訪ひ給へといひて消え失せぬ。（中入）

僧、小野に赴き草深き中にて讀經回向すれば、かの浮舟の亡靈（後シテ）現れ出で、身をはかなみて宇治川に入りし折、横川の僧都に助けられ、物の氣をも除けられしが、なほも殘る執心晴らさんため、今又こゝに來りて、僧の供養を受け、終に都率天に生まるゝことを得たりと悅びて消え去る。

謠ひ方

玉葛と同じ樣なる曲にて源氏物なれば、位は重くなく品よく謠ふべし。

△**シテ**　一セイは朗かにさらりめに謠ひ出し、二の句はうつきりと、サシより調子を改め閑かめに、ワキとの掛合は閑かに上品に、クリ後のサシも閑かの內に運びを附け、クセ後ワキとの掛合は閑かに謠ふ。

△**後シテ**　調子を抑へて中音にて閑かに出で、「淺ましや」より引立て、朗かにさらりめに段々運びを附け、「あふさきるさ」より氣を替へ浮きやかに、「頼みしまゝに」と閑かに謠ふべし。

△**ワキ**　旅僧なれど曲柄により、餘り輕くなく閑かに出で、道行は朗かに、シテとの掛合はさらりと、中入後の待謠は閑かに朗かに謠ふべし。

△**地**　初同は調子高くならぬ樣に閑かに謠ひ出し、クリは朗かに、クセは閑かに締りを附け品よく、「なほ物の氣の身に添ひて」と落着いて、切前の「われかの氣色も」より浮きやか

にさらりと、切は朗かにさらりめに運びを附け、踊らぬ樣に論ふ。

語　釋

浮舟 ― 源氏物語、宇治十帖の浮舟の君の歌に、「橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞよるべしられず」とあるに依りしものなり。浮舟の君は、桐壺の帝の第八の宮、宇治のうばそくの宮の御女なり。母は中將の宮とてさぶらひけるに、宮忍びて物の給ひし程に此浮舟生れ給へり。此君の異腹の姉君を宇治の大姫君とて、薫大將心がけ給ひけれども、逢ひ給はでうせ給へば、いかで此君に似たる人もがなと思して、妹の浮舟を尋ねて宇治に置き給へり。然るを匂兵部卿の宮、此君を見染め給ひしより御心にかゝり、宇治へおはして薫大將のまねをして、一夜逢ひ給へり。それより忍び〳〵に通ひ給ふ。この事薫大將ほの聞き給ひて、都へ迎へ給はんと思して其用意あり。又兵部卿の宮も薫大將より前に京へ迎へんと申しければ、浮舟の心に二夫に見えしことを恥ぢ給ひて、我と身をいたづらになして、宇治の川に身を投げ給はんとしけるを、物の怪に誘はれて木の根に臥し居りしを、横川の僧都長谷よりの下向に宇治に宿りし夜これを見つけ、小野へつれ歸り加持などして本性になり、それより僧都の教化によりて尼になれり。

初瀬山 ― 奈良縣磯城郡、長谷觀音のある處。

初瀬山夕越え暮れし云々 ― 新古今集第十卷、羈旅歌に載す、禪性法師の歌、「長月の頃初瀬に詣でける道にてよみ侍りける」と詞書して、「初瀬山夕こえくれて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹く」とあり。歌意は、初瀬山を未だ越え終へざるうちに日暮れたれば、そのほとりに宿をとりけるに、彼方の三輪の檜原には秋風が吹き渡つて居た、との意。

三輪 ― 奈良縣磯城郡にあり。三輪の山は、三輪町の東に屹然たる孤峯の杉檜にて蔽はれ居るをいふ。麓には大和國の一の宮大神神社鎭座す。これは神代に大國主命の中津國を經營せられし時、御大業成就するに及び、その幸魂（さちたま）、奇魂（くしたま）をこの所に齋き祭られたるが大物主神にて、我國最古の神社なり。延喜の御代に名神大社に列り、歷朝格別の御崇敬あらせらる。この神社の外々と違ひて不思議なることは、神殿といふものなく、三輪山の全體が御神體にして、唯拜殿のみ設けらる。境域三百餘町歩といふ廣大の地にて、二十餘の附屬建物その間に散在して、神威嚴然たるものなり。

しるしの杉云々 ― 古今集第十八卷、雜歌下に載す、讀人不知の歌、「わが庵は三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門」とあり。歌意は、私の家は三輪山の麓にあるから、逢ひたくば尋ねてお出でなさい、杉の立つてゐる門がそれである、との意。

狛のわたりや足早み ― 京都府相樂郡にある。現今の上狛村なり。

思ひ草葉末の露 ― 金葉集第七卷、戀歌上に載す、源俊頼の歌、「權中納言俊忠卿家にて戀歌十首人々詠みけるに來不留戀といへる事を詠める」と詞書して、「思ひ草葉末に結ぶ白露のたま〳〵きては手にもたまらず」とあり。

月日も受けよ云々 ― 新古今集第十八卷、雜歌下に載す、太上天皇の御歌、「大空に契る思ひの年もへぬ月日もうけよ行末の空」とあり。歌意は、堅く心中に誓ひて年頃を過ぎ來れり、あはれ願はくは日の神、月よみの神もこの年頃我が心に堅く思ひ居る事を承知して、是非これを實行すべき行末を守り給へ、との意。

御注連縄長く云々 ― 夫木抄に載す歌、「神垣に千年をかけてみしめなは長く久しき御代を祈らん」とあり。

里の名を聞かじといひし ― 源氏物語、浮舟の卷に、「常よりも、思ひやり聞ゆることまさりてなんと、白き色紙にて、立文なり。御手もこまかにをかしけならねど、書きざまゆゑゆゑしく見ゆ。宮はいと多かるを、ちひさく結びなし給へるさま〴〵をかし。（右近）まづかれを人見ぬ程にと聞ゆ。（浮舟）今日は得聞ゆまじと、はぢらひて、手ならひに、『里の名を我身にしればやましろの宇治のわたりぞいとゞ住みうき』宮の書き給へりし繪を、時々見て泣かれけり」云々とあるを引く。

橘の小島が崎 ― 同浮舟の卷に、「かれ見給へ、いとはかなけれど、千年も經べき緑の深さをとのたまひて、（匂）『年ふとも變らむものかたちばなの小島のさきに契るこゝろは』女も、珍しからむ道のやうにおぼえて、（浮舟）『たちばなの小島は色も變らじをこのうき船ぞゆくへ知られぬ』」とあるを引く。

汀の氷 ― 同浮舟の卷に、「雪の降り積れるに、わが住む方を見やり給へば、霞のたえ〴〵に梢ばかり見ゆ。山は鏡をかけたるやうにきら〳〵と夕日に輝きたるに、昨夜わけ來し道のわりなさなど、多くそへて語り給ふ、『峯の雪みぎはの氷ふみわけて君にぞまどふ道はまどはず』」とあるをいふ。

晴れぬながめと ― 同浮舟の卷に、（薫消息）「思ひながら日比になると、時々はそれよりも、おどろかい給はんこそ、思ふさまならめ、おろかなるにやはなど、はしがきに、『水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらすころ』」とあるを引く。

小野 ― 山城國愛宕郡。浮舟の養母小野の尼君の住みし處。

大比叡の杉 ― 新續古今集に載す、堯仁法親王の御歌、「大比叡や杉立つかげをたづぬればしるしも同じ三輪の神垣」と

あるをいふ。

横川の水 ― 新續古今集に載す、眞緣上人の歌、「思ひ出づる雲井の月の面影も横川の水にすましてぞ見る」とあるを引く。

憂き名漏れんと云々 ― 源氏物語、浮舟の卷に、「憂きさまにいひなす人もあらんこそ、思ひやり恥しけれど、心淺くけしからず、人わらひならんを聞かれ奉らんよりはと、思ひつゞけて、『歎きわび身をば捨つともなきかげにうき名流さんことをこそ思へ』」とあるをいふ。

あふさきるさ ― 八雲抄に、あふさきるさといふは、「とするも、かくするも」といふことなりとあり。孟津抄に、「行くさま、くるさま」なり云々、とあり。

都率 ― 三十三天の一。

間狂言

所の者出でワキと問答し、浮舟のことを語りて退く。

是は宇治の里に住む者にて候。今日は徒然なる折からなれば。罷り出で心を慰めばやと存ずる。いや是なるお僧はいづくより御越しなされたるぞ(此間せりふ常の通り)まづ此宇治の里に揚卷の正親と申すと。又中の君と申すと御兄弟おはすを。この揚卷の正親をば薫大將の心を掛け御申しあれど。遂に御同心なかりたると申す。又中の君は匂兵部卿の北の御方にならせられたると承る。其頃揚卷の君は父宮に後れ給ひし故。明暮この事をのみ歎きおはして。これも程なく空しくなり給ふにより。薫御愁傷淺からざりし間。中の君などの劣(をとり)の腹に浮舟と申して。揚卷の正親に似まゐらせられたる御方を。尋ね出だし薫に見せ給へば。宇治に置き御申しあるを。或夜匂宮薫に眞似て內に入り契りを込められたるによつて。それより忍び〳〵に御通ひありしが。宇治は人目繁しと思し召し。日暮れて舟に乘せ遠(をち)なる家へ御出である時。橘の小島が崎へさし寄せ給ひて。浮舟の御歌に。橘の小島は色も變らじを。この浮舟ぞ行方知られぬと。この歌故に浮舟とは申す由承る。されども浮舟の匂宮と心のあるを。薫御存じあれば。浮舟はもの憂く思ひ給ひ。宇治川へ身をも投げんと思し召すか。曉方妻戸を開け給ふを。何となく男の來りて懷かしきを口にし。そのあたり近き木の下に置きたるを。小野の尼初瀨詣での歸さに。この宇治の院に泊り給ひしが。浮舟の御事を聞き小野へ伴ひ申され。横川の僧都の御祈りにて。物の氣も悉く去り申せど。其後遂に尼に御成りありて。小野にて果て給ひたると承る。まづ我等の存じたる事はかくの如くにて候(ソウキ(シカ)く)是は奇特なる事仰せらるゝものかな。浮舟は小野にて果て給ひたるとは申せど。若き時は此邊に住み給ふにより。御心を殘し置かれ。お僧に言葉を交はされたると存ずる間。これよりすぐに小野へ御出でありて。かの菩提を御弔ひあれかしと存ずる。

縫箔 小袖の裝束にて箔を置き繡を施せるものなり、仕立は唐織と同じ、本曲前シテは、之を兩袖脫下げ「腰卷き」に著けて、下にせる摺箔の上半身をあらはす、これ「モギ胴」姿にして、その上に水衣を著る、かくの如き例は隅田川、桜川、三井寺等甚だ多し、またモギ胴の上に長絹を著くる羽衣、二人靜、杜若の如き曲、或は舞衣を著くる富士太鼓の如きも此の他公達物の著付等に亦用あり

作物	後シテ 浮舟女	前シテ 女	ワキ 旅僧	装束附(浮舟)
棹	面、增又ハ增髮　髮　無紅臺帶 襟白赤　着附摺箔　唐織脫下　扇	面、若女　髮　無紅臺帶 襟白淺黃　着附摺箔　白水衣 縫箔腰卷　縫腰帶　扇	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 腰帶　扇　數珠	

素謡座席順 シテ ワキ

浮舟

ワキ僧詞 閑カニ

「これは諸國一見の僧にてい。われ

ワキ名乗

この程は初瀬にいひがこれより

都によらばやと思ひい初瀬山

夕越え暮れ宿もはや夕越え

暮れ宿もはや。檜原のよそに

三輪の山。るしの杉も立ち別れ

嵐とともに橋の葉の。暫し休らふ程もなく。猶のわたりや是早み。宇治の里にも着きにけり宇治の里にも着きにけり。急ぎは程にこれはは宇治の里に着きて。暫く休らひ名所をも眺めばやと思ひ

シテ女上歌 優ニ
一セイ
拍子三合ハズ
紫積み舟の寄る波もなほたづ

前シテ 一セイ

きなき憂き身かな　憂きは心の科ぞとて。誰が世をかこつ方もなく　地上　住み果てぬ住家は宇治の橋柱。立居苦しき思ひ草。葉末の露をうき身にて。老い行く末も白眞弓。もとの心を歎くなり　拍子合ヤ　とにかくに定めなき世の影

○小謡

二ウ上歌（因カニスラリ）

頼む（ヤウ切）○月日も受けよ行く末の（元へ戻シ）月日も受けよ行く末の神に祈りの叶ひなば。頼みをかけて御注連縄長くや世をも。祈らまし長くや世をも祈らまし。（ロキ詞カシテサラリ）いかにこれなる女性に尋ねゆすべき事のゆ（シテ因カニ）此方の事にてゆか何事にてゆぞ（ロキサラリ）この宇治の

シテ ロキの問答

里に於て。（イニシヘ）古如何なる人の住み給ひてゆぞ（クヲ）安し（ロ）く御物語りゆへ（シテ因カメニ）「所には」住みゆへ（エ）ども。賤（イヤ）しき身にてゆへば。（クヲ）安しき事をも知らずゆざりながら。（イニシヘ）古（エ）この所には。浮（ウキ）舟とやらんの住み給ひ（イ）しとなり。（カ九上末ニ優ニ 拍子合ハズ）同じ女の身なれども。數にもあらぬ（ワ）憂き（ヲ）身（ヲ）なれば。（イ中）いかでか

さまでは
まノ浮ヲ内ヘトリテ浮カズで八中サゲノ如キ節抜ヒテリ定家傷のなき世なりけり〻世なノ節抜ヒト同ジ事ナリ

○小謡

さまでは知りさむらふべき「げに光源氏の物語。なほ世に絶えぬ言の葉の。それ添へて聞かまほしきに。心に残り給ふなよ」「むつかしの事を問ひ給ふや。里の名を聞かじと思ひ給へ。人もこそあれ。その身は何と問ひ給ふぞ」○さなきだにいにしへの。

あさぎり雲の色添へて

元ヘ戻シ さなきだにいにしへの。恋しかるべき橋の。小島が崎を見渡せば。河より遠の夕煙立つ河風に行く雲の。あとより雲の色添へて。山は鏡をかけまくも。かしこき世々にありながらなほ身を宇治と。思はめやなほ身を宇治と思はめや。「なほなほ浮舟の御事

○サシ曲獨吟

クリ地 以下

委しく御物語りへ（地上本一朗カニ）「そもそもこの物語と申すに。その品々も妙にて。事の心廣ければ。拾ひていはん。言の葉の。○「玉の數にもあらぬ身の。背（同運ビラ付ク）きし世をや顯すべき　まづこの里に古は。人々あまた住み給ひけるたぐひながら。とり分きこの浮舟は菫中將

のかりそめに。すゑ給ひしなりけり。

クセ　人がらもなつかしく。心ざまよしありておほとかに過しなし給ひしを。物いひさがなき世の人の。ほのめかし聞えて。を。色深きや心にて。兵部卿の宮なんのいとまなき。宵の人目も悲しくて。

三番目ノキハ　おはせしにこそ。

垣間見つゝおはせても、いと不便なりし業なれや。その夜にさても山伏のめづらかなりし有様の心にしみて有明の月澄み昇る程なるに、水の面も曇りなく舟さゝとめし行方とて。汀の氷踏み分けて道は迷はずとありしも浅からぬ御契りなり。一方

はのどかにて訪はぬ程経る思ひさへ晴れぬ眺めとありしにも。涙の雨や増りけん。そこにかくに思ひわびこの世になくもならばやと。歎きし末はかなくて絶えあとなくなりにけり。終にあとなくなりにけり。「浮舟の御事は委しく承りぬ。さてさて

御身はいづくに住む人ぞ「これはこの
所にかりに通ひものするなりわらは
が住家はふの野の者。都のつてに
訪ひ給へ」（半カシテ）「あらぬ思議や。何とやらん
事たがひたるやうにぃさてふの野にては
誰とか尋ね申すべき」（シテ閑カニ）「隠れはあらじ
大比叡の。杉のしるしはなけれども。

カ九上未（シトヤカニ）

横川の水のすむ方を。比叡坂と尋
ね給へ（地歌同仲スラリカヘテ）べし（地拍子合）なほ物の氣の身に添
ひて。惱む事なんある身なり法力を
頼み給ひつ。あれにて待ち申さんと。
浮き立つ雲の跡もなく行く方知らずな
りにけり行く方知らずなりにけり（中入間）

（半詞寛タリ）「かくてふの野には来れども。いづくを

○切迄調一声
○又囃子

宿と定むべき

上歌
待謡
○所の名さへ小野なれば。所の名さへ小野なれば。草の枕は理や。今宵はこゝに疲を讀み。かの御跡を。吊ふとかやかの御跡を吊ふとかやゝ

後シテ女中
一声
柏子三合ハヅ
柳ヘムミシヤトリ
甲

亡き影の絶えぬも同じ。涙川よゝ

上一気ヲ又ヘサラリメニ

ゝ定めぬ浮舟の。法の力を頼むなり。あさましやもとよりわれは浮

後シテ一声

舟の。寄る方わかで漂ふ世に。憂き名漏れんと思ひわび。この世になくもならばやと。明暮思ひ煩ひて。人皆寝たりしに。妻戸を放ち出でたれば。風烈しう川波荒う聞えしに。知らぬ男の寄り来つゝ。誘ひ行くと思ひしより。心も空になりはてゝ

この世になくもならばやと

風烈しう川波荒う

聞えしに

上元ヲカヘユクリ

あさきるさの事もなく「われか
の氣色もあさまし「あさましや
あさまやな橘の「小島の色は變
らじを「この浮舟ぞよるべ知られぬ
世に廣けれど殊にわが心一つに怠
らず明けてはゆづる日の影を絶え

よろ人知られぬ

知られぬ
れハ中廻シヲ大キク
語フ節板ヒナリ

同上

○獨吟
○仕舞

柏子三合

○大慈大悲の理は。大慈大悲の理は。

ぬ光と仰ぎつゝ。暮れては闇に迷ふ
べき後の世かけて頼みしに「頼みし。
まゝの觀音の慈悲　頼みしまゝの
觀音の慈悲。初瀬の便りに横川の
僧都に見つけられつゝ小野に伴ひ。祈
り加持して物の氣除けしも夢の世
になほ。苦しみは大比叡や横川の杉の。

苦しみは

平ひ受けんと思ひ一に

思ひのまゝに執心晴れて

杉の嵐や

古き事ども。夢に現れ見え給ひ。今この聖も同じ便りに吊ひ受けんと思ひ一に。思ひのまゝに執心晴れて。都率に生まるゝ。嬉しきとゝかと思へば明け立つ横川。かと思へば明け立つ横川の。杉の嵐や残るらん杉の嵐もや残るらん。

昭和七年五月十日納本
昭和七年五月十五日發行

訂正著作者　観世左近
廿四世

發行兼印刷者　東京市神田區錦町一丁目十番地　檜常之助

東京市神田區錦町壱丁目十番地
振替東京三五五二番　電話神田二五二六番

發行所　檜書店

京都市二條通麩屋町東北角
振替大阪三六一八番　電話上二一九〇番

京都　檜書店

複製禁止
檜書店所有

昭和版

現代京

謹本奥書

終